

Alb

E120

秘

昭和十五年六月

日滿支に於ける物價の情勢

外務省通商局

通  
139  
外史

40  
5

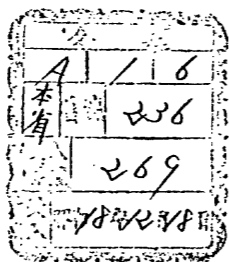
5  
外

139



本稿は過般現地に於ける物價問題調査の爲滿支各地に出張せられたる  
 土屋計左右氏の視察報告であるが最近の圓域内に於ける物價問題の重大  
 性に鑑み特に印刷に附し執務上の參考に供する次第である。

外務省通商局



報告提出に際して

「物價の安定」が現下の戦時經濟遂行上根本的な重要問題であることは申すまでもない。しかるに我が國に於ては事變以來既に三星期を重ね、連年百億を超える戦時財政豫算が取組まれ、更に滿洲國では産業開發五ヶ年計畫北邊振興計畫等によつて莫大なる物資と資金とが需要されてゐる。また北支に於ては事變遂行と經濟開發とによつて惹起された物資の需要と聯銀券の膨脹とに反比例して物資の出廻りは激減してをり、中支では同様の事情に加ふるに、法幣の増發と換物人氣とによつて、各地共それぞれ物價の暴騰を見るに至つてゐる。即ち、日本では最近低物價政策が着々功を奏して寧ろ反落を續けてゐるが、北支では既に事變前の四倍を遙かに突破して最も高く、中支これにつき、降つて滿洲、「最低が日本といふ順位になつてゐる。

大陸、殊に北支に於けるかくの如き物價騰貴はただに軍事行動遂行、占領地域の經濟復興、經濟建設を阻礙するばかりではなく、對策宜しきを得ない場合には、北支の聯銀券が圓に等價でリンクしてゐる關係を通じて、日本及び滿洲の物價政策を脅かす危険があり、物價問題は單にそれぞれの地方的問題たるばかりではなく、相互に密接な聯關を有してゐる。これをまた通貨の問題としてみる場合には、物價と通貨價值とは相表裏をなすものであるから、北支の聯銀券、中支の軍票の價值と直接緊密なる關係にある。しかも各地の物價が相互關係を有する限り、通貨問題としてもこれを各々の地域的問題としてのみ見ることは許されず、東亞ブロック内通貨の根底をなすものとして理解されなければならない。東亞新秩序建設の高い觀點に立つて、物價問題を考へることが必要

なる所以である。

政府に於ては既に大陸間系通貨価値維持の大方針を闡明してゐるのであるから、我々は徒らに通貨不安をかもす如き通貨論は慎み、通貨価値維持の諸方策を真剣に考究すべきであると思へる。しかる場合には、物價問題は一段と重大となつて來るのであるが、大陸に於ては日本内地と同様の物價統制は全く不可能に屬するといはなければならぬ。従つて従來低物價政策を行はんとして來た北支當局も、これを放棄するの止むなきに至つてゐる。これは勝銀券若しくは軍票の價值維持のための回収工作としても要求されることであつて、現在の状態に於ては止むを得ざる處置といはねばならない。とすると低物價政策を堅持する日本・滿洲と、物價放任の北支・中支とが通貨に於ては等價で聯繫するといふ關係になるのであるから、各地間の物價調整、即ち日本・滿洲への高物價の波及を如何にして遮断するかといふことが重大な問題となる。

筆者は先般滿洲・北支・中支を視察するに當つて、上述の如き觀點より、通貨価値維持に最も重要な關係を有する物價の情勢につき、若干の調査を行つて來た。もとより短期間の視察旅行ではあり、且つ準備も充分でなかつたために、断片的な、或ひは獨斷的な觀察の誣を免れないが、以下旅行中に得た素材を基礎として、大陸各地の物價情勢を報告したいと思ふ。當局の大陸物價政策に對する參考の一助ともなれば仕合である。

なほ附言を要するは、我々の旅行はあたかも北中支の物價が最高潮に達した五月中のことであつて、その後中支を先頭に北支も追隨して多少の反落を見た。しかし本稿は視察當時の情勢を報告するに止めてゐることを諒とせられたい。

昭和十五年六月

外務省囑託

土屋 計左右  
松宮 克也

目次

報告提出に際して.....	一頁
一、物價調査の要點.....	一
二、日 本.....	三
三、滿 洲.....	九
(一) 物價騰貴の現状.....	九
I 物價指數に現はれた騰貴.....	九
II 物價の實情.....	一三
(二) 物價騰貴の諸原因.....	一七
I 物價不足と通貨膨脹.....	一七
II 輸入品、特に日本品價格の昂騰.....	一九
III 北支への物資流出.....	二一
IV 換物人氣.....	二三
四、北 支.....	二四

(一) 各地物價騰貴の現状	二四
A 天津	二四
B 北京	三〇
C 青島	三一
D 濟南	三三
(二) 物價騰貴の諸原因	三五
I 物資の不足	三五
(1) 農業生産の減退	三五
(2) 食料輸入の増大に伴ふ生産財その他物資の輸入減少	三七
II 聯銀券の膨脹	三九
III 爲替の低落	四一
IV 換物思惑の増大	四四
(三) 北支に於ける邦品物價について(東京物價との比較)	四五
五、中 支(上海)	四九
(一) 物價騰貴の現状	四九
(二) 北支物價との比較	五五
(三) 米價の問題	五七
(四) 物價騰貴の原因	五九
附 重慶及び昆明の物價について	六三

### 一、物價調査の要點

四ブロック内各地の物價騰貴を調査するに際しては、先づ各地の物價がそれ／＼どの程度に騰貴してゐるかを検討し、最近に於ける昂騰の特殊的原因を探究し、ついで相互に等價で聯繫してゐる通貨を有する各地の物價の間に、どのやうな開きが存在するかを指摘することが必要である。しかしながら、日本、滿洲、北支、中支では經濟事情を異にしてゐるのであるから、これら各地の物價を表示する物價指數がそれ／＼獨特の品目によつて構成されてゐることは止むを得ないとしても、算定方法をも異にしてゐることは、各地の騰貴率を比較することを著しく困難にしてゐる。況して現在の時點に於ける各地間の物價を比較することはなほ一層難しい問題である。これらの困難を意識しつゝ、各地の公表せられてゐる物價指數から出發して現地に於ける具體的な實情を織込んで、物價騰貴のありまゝの姿を描出すことに努力してみたい。而して各地の物價について事變以來の騰貴を比較する場合には、何處に基準を置くかゞ問題となる。基準の取り方によつては、某地の勝り方が鈍く、他の地の昂騰が激しく現はれ、事變の影響としての物價騰貴の真相を傳へない虞がある。事變以來の物價騰貴を云々する場合、支那事變勃發直前の昭和十二年（一九三七年）六月を基準とする例が多いが、筆者は事變勃發の前年たる昭和十一年（一九三六年）平均を基準として採用した。その理由は各地の物價指數を一瞥すれば、直ちに理解されるのであるが、日本では金輸出再禁止後の急騰から一服してゐた物價が、昭和十一年秋以來馬場藏相の所謂準戰時財政に入つて再び急騰し、事變勃發の直前たる昭和十二年六月には既に戰爭氣構裡に相當高い水準に達し

てゐたものであるから、それ以来の騰貴率は比較的低いものとして現はれる。これに對して支那では、一九三四、五年あたりは著しく低い物價水準に低迷し、一九三六年に入つて漸やく世界不況前の水準に恢復した状態であつて、一九三七年六月には前年に比較すれば昂騰してゐるもの、日本のそれとは比較すべくもないから、騰貴率比較の公平を期するためには、事變勃發の直前よりも寧ろ事變前年たる昭和十一年平均を基準とする方が適當であると考えたからである。各地の個別的檢討に入るに先立つて、昭和十一年（一九三六年）平均を一〇〇として換算した各地の物價指數を左に掲げる。大體の傾向はこの表によつて看取されるであらう。

第一表 日滿支卸賣物價指數比較（一九三六年＝一〇〇）

東 京	新 京	天 津	上 海	大 連	長 春
一九三七年平均	一一〇・五	一一七・六	一一七・五	一一八・一	一一八・一
一九三八年平均	一一七・一	一二〇・六	一二二・〇	一二五・九	一二五・九
一九三九年一月	一一三・〇	一一一・七	一一五・九	一二一・六	一二一・六
二月	一一三・七	一一五・〇	一二九・一	一二五・三	一二五・三
三月	一一三・九	一一六・〇	一三〇・三	一二九・一	一二九・一
四月	一一四・六	一一六・〇	一三〇・三	一二九・一	一二九・一
五月	一一六・三	一一七・五	一三〇・五	一三〇・五	一三〇・五
六月	一一六・三	一一七・六	一三〇・八	一三〇・八	一三〇・八
七月	一一六・八	一一七・七	一三三・一	一三八・五	一三八・五
八月	同	同	一三七・七	一七五・〇	二五四・五
九月	同	同	一四五・六	一七六・〇	二七四・四
十月	同	同	一四八・二	一八三・五	二四八・二
十一月	同	同	一五一・五	一八三・三	二七九・一
十二月	同	同	一五八・八	一九〇・三	三〇四・六
一九四〇年一月	同	同	一六〇・一	一九六・九	三二二・九
二月	同	同	一六〇・一	一九六・五	三六五・一
三月	同	同	一五七・八	二〇五・五	三八四・八
四月	同	同	一五八・六	二一一・一	三九九・一
五月	同	同	一五七・七	—	四三五・九

備考—下記指數より一九三六年＝一〇〇に換算

東京 日本銀行東京卸賣物價指數  
 新京 滿洲中央銀行新京卸賣物價指數  
 天津 支那問題研究所天津卸賣物價指數  
 上海 共同租界工部局上海工人工生活費指數

二、日 本

日本内地に於ける物價騰貴に關しては、此處で贅言を弄するまでもなく、既に専門家の調査研究が行はれてゐるのであるから、たゞ大陸の物價騰貴と比較するための前提として數字のみについて闡説する。日本銀行調査の明治三十三年を二〇〇とする東京卸賣物價指數によれば、本年一月が最も高く三一九・九で、爾後統制強化のため

第二表 東京卸賣物價指數

日本銀行課査	（明治三十三年十月＝一〇〇）	（昭和十一年十一月までは五十六品目の算術平均指數、同年十二月以降は百十品目の算術平均指數にて換算）
昭和六年	一九三一年	一五三・〇
同 七年	一九三二年	一六一・一
同 八年	一九三三年	一七九・五
同 九年	一九三四年	一七七・六
同十年	一九三五年	一八五・五
同十一年	一九三六年	一九七・五
同十二年	一九三七年	二三八・二
同十三年	一九三八年	二五二・三
同十四年	一九三九年	二七七・五
同十五年	一九四〇年	二九九・五
一月	同	同
二月	同	同
三月	同	同
四月	同	同
五月	同	同
六月	同	同
七月	同	同
八月	同	同
九月	同	同
十月	同	同
十一月	同	同
十二月	同	同



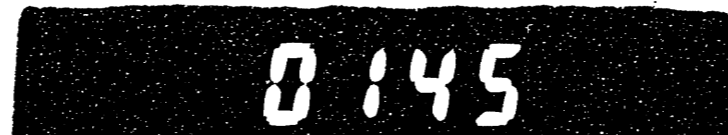
第三表、東京卸賣物價類別指數 (計算平均)

日本銀行調査 (一九三三年平均=100)

類別	昭和十五年 一九四〇年				昭和十四年 一九三九年			
	十二月	一月	二月	三月	十二月	一月	二月	三月
食料	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3
農産物	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3
其他食料	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3
織物	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3
原糸	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3
布帛類	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3
建築材料	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3
金属類	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3
燃料	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3
肥料	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3
工業薬材	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3
其他	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3	119.3

に反落し、五月は三二・八であつて、これを事變前年二〇〇に換算すれば一五七・七である。即ち事變前年に比し五割八分弱の騰貴といふことになる。事變前年ではなく昭和十二年六月を二〇〇として算出すれば、騰貴率は一段と低く僅かに三割八厘にすぎない。日本の物價が事變勃發までに、既に著しく昂騰してゐたことは上述の如くであるが、右のやうな騰貴率は我々の常識的な概念とは凡そ相容れないものである。このことはいふまでもなく、日銀の物價指數が公定價格乃至統制價格を基準として算出されてゐることに基因してゐる。オフインシアルな統計としては、洵に當然なことであるが、實際の經濟活動に於て開相場を無視することが出来ない現状にある限り、我々としては何んとかして現實の物價騰貴を捉へてみなければならぬ。

日銀卸賣物價指數の調査品目は百十品目であるが、これらの商品中少くとも三、四十品目には開取引が行はれてゐるやうである、開相場にも自らその時々標準的相場があるのであらうが、普通の相場と違つて統一的な相場がないことが、また開相場の特徴であらう。我々が耳にする限りでも、或るものは公定價格の二倍三倍であり、あるものは十倍乃至十数倍を唱へてゐることさへある。従つて開相場指數を作成するといふことは、本質的に不可能なことに屬する。また或る商品の國內取引が全部開で取引されてゐるならば、その物價は開相場のみを知ればよいのであるが、國內取引の極く一小部だけが、開取引されてゐるといふやうな場合には、その相場がいかに公



定價格の何十倍を唱へやうとも、國內價格としてはさして重要視するに當らないことになる。かくて、物價指數に開相場を參酌する場合には、開相場による取引量の多寡をも計算に入れなければならないから、この意味からかかる指數の作成は不可能となる。従つて開相場を算入した物價指數を作らうとするならば、或る程度「勘」によつて割出す以外に方法はないといへるであらう。

日銀調査品百十品目中三、四十品目に開相場が行はれてゐると述べたが、これら三、四十品目は物價指數作成上のウエイトからみるならばさして重要なものではないから、假令これら商品の價格が公定價格を三、五割上廻つてゐるとしても、物價全體に及ぼす影響は輕微なものである。とすれば實際に日銀の物價指數はさしたる修正を施さなくともよいのであらうか、我々の知らない開相場が廣汎に行はれてゐると考へなければならぬのではないか。しかし一方、物資のストックが相等あつた時期に於ては開取引も活潑に行はれ得たが、現在のやうにストックが欠乏して來れば、配給統制の強化されてゐる重要商品に於ては開取引の餘地は非常に狭められてゐる筈である。といふ風にも考へ及ぶのであつて、種々迷はざるを得ない。しかしこの方の専門家某氏の觀察によれば、全く「勘」に属する程度であるが、公定指數の二割乃至三割増といふのが大體當を得てゐるやうに思ふのであつて、結局開相場を斟酌した卸賣物價指數は事變前年を100として一八〇乃至一九〇あたりではないかといふ結論に落付いた。即ち事變前年に比し八、九割勝つてゐるのではないかと考へるのである。

これを他の方面から、統制の比較的緩い小賣物價指數から見よう。日銀小賣物價指數(大正三年七月一〇〇)は本年四月に二六二・七であつて、昭和十一年を100とすれば一六五・二となり、同行の卸賣物價指數を多

少上廻つてゐるが、この指數も卸賣物價指數同様公定價格に縛られてゐるから、ヨリ非公式な指數を採つてみる。東京市生活用品小賣價格指數(昭和十二年七月一〇〇)は、内閣統計局の全國生計費指數調査のために作成されてゐるもので、日常生活用品百四十八品目を對象としてゐるが、日銀指數に比すれば、多少とも實際の小賣價格變動を反映してゐるやうに思はれるから左に掲出する。

第四表 東京市生活用品小賣價格指數 (單純算術平均)

時期	總平均	飲食料品	住居用品	光熱材料品	被服身裝品	其の他
昭和十二年下半期	一〇三・七	一〇五・八	一〇一・一	一〇六・一	一〇〇・二	一〇一・二
同 十三年上半期	一一二・五	一一一・八	一一〇・五	一一二・〇	一一一・一	一一〇・八
同 十三年下半期	一一三・九	一一〇・一	一一一・三	一一二・五	一一一・八	一一一・四
同 十四年上半期	一三一・六	一二八・二	一二六・一	一二八・七	一二七・九	一二七・四
同 七月	一四〇・五	一三五・一	一三一・八	一三〇・七	一二七・九	一二七・九
同 八月	一四二・七	一三八・七	一三三・〇	一三二・七	一二七・九	一二七・九
同 九月	一四九・〇	一四二・八	一四四・五	一三三・三	一二八・二	一二八・七
同 十月	一五三・三	一四九・五	一四六・六	一三七・三	一二八・五	一二八・八
同 十一月	一五五・六	一五二・三	一五一・六	一三八・八	一二九・五	一二九・一
同 十二月	一六三・九	一六三・〇	一六一・五	一四七・五	一三〇・三	一二〇・八
同 十五年一月	一七四・三	一七四・五	一六九・七	一六四・〇	一二四・五	一二五・〇
同 二月	一七九・二	一七九・二	一七四・七	一七〇・〇	一二七・〇	一二七・九
同 三月	一八九・二	一九〇・〇	一八五・六	一六三・八	一二四・〇	一二〇・三
同 四月						

七

同 五月 一八六・三 一八二・八 一九一・〇 一六五・〇 二三六・二 一三三・五

更に最近東京市消費経済課が諸婦人團體と協力して調査を開始した東京市日用品小賣價格指數は、「開相場指數」とも稱されてゐるが、事變直前を一〇〇として、本年三月二四・二、四月二三・〇、四となつてをり、日用品小賣價格が既に二倍三分に昂騰してゐることを物語つてゐる。

元來物價指數では、卸賣物價が最も敏感に經濟界の變動を映して動き、小賣物價は卸賣物價の變動に遅れて追隨するのが從來のノルマルな状態であるが、これら指數にも現はれてゐる如く、現在の日本の物價は經濟統制の現段階を反映して變態的な様相を呈してゐる。即ち統制が重要生産財に重點を置かれて、日用品生活品、特に鮮魚蔬菜等の食料品は統制が技術的にも困難である處から殆んど全く統制外に置かれてゐたこと、その他の商品に於ても卸賣部面では統制の眼が届くが、小賣部面では統制が卸賣程徹底し得ないこと等の諸理由によつて、小賣物價指數が卸賣物價指數を抜いて上昇してゐるのである。

前記の如き諸理由が存在するとしても、小賣物價指數が二〇〇を越えてゐるのに對して、卸賣物價指數が一五七・七といふことはやはり諒解に苦しむのであつて、我々が事變前年を一〇〇として現在の卸賣物價指數を一八〇乃至一九〇と推定するのも理由なしとしない所以である。しかもなほ、我々の日常生活から受ける常識的概念からして、卸賣物價が事變前の二倍になつてゐないといふことは、何か内輪の評價に思はれるかもしれないが、近來統制機構の整備と國民の自覺とによつて開取引が順に減少しつゝあることを考へるならば、決して過小評價とはいへないであらう。以上の如き考慮を経て、日本内地の物價は事變前年に比し八、九割方騰貴してゐるといふ

前提に立つて、滿洲・北支・中支に於ける物價動態の比較検討に移らう。

### 三、滿洲

#### (一) 物價騰貴の現状

##### I 物價指數に現はれた騰貴

滿洲の卸賣物價指數は、滿洲中央銀行が新京、奉天、哈爾濱の三都市について調査公表してゐるが、新京のみについて検討する。大同二年（一九三三年）平均を一〇〇とする新京卸賣物價指數は、本年四月に二三四・六を示し、一九三六年一〇〇に換算すれば二二一・一に當つてゐる。

第五表 新京卸賣物價類別指數（單純算術平均）

滿洲中央銀行調査（一九三三年一〇〇）	
特産	九四・五
雜穀	九二・八
食料及嗜好品	九四・〇
紡織品	九〇・四
金物	九四・〇
建築材料	九二・三
燈火及燃料	八九・八
雜品	九三・四
總平均	九二・六
一九三四年平均	一七九・二
一九三五年平均	一〇四・五
一九三六年平均	一〇四・四
一九三七年平均	八八・三
一九三八年平均	九一・八
一九三九年平均	九二・九
同 一月	二〇二・四
同 二月	二〇二・四
同 三月	二〇二・四
同 四月	二〇二・四
同 五月	二〇二・四
同 六月	二〇二・四
同 七月	二〇二・四
同 八月	二〇二・四
同 九月	二〇二・四
同 十月	二〇二・四
同 十一月	二〇二・四
同 十二月	二〇二・四





而してその勝貴の過程を見るに、事變勃發以來一九三七年は殆んど勝貴なく、三八年の五、六月に急勝を見せその後又低迷して昨年春からチリ／＼勝げ、本年に入つてから一月二〇・三、二月二〇・九〇、三月二一・八・六、四月二二・四・六と管てない顯著な勝げ足を示し、三月には遂に事變前年に比較して二〇・五・五、四月には二二・一・二倍を越えるに至つた。しかしながら、果して滿洲の物價勝貴が事變前の二倍一分にすぎない程度であらうか。日本の勝貴と比較してみても疑問を抱かざるを得ない。これはいふまでもなく滿洲國の指數が、日本と同様公定價格に基いて算出されてゐる結果であつて、實際の昂勝は果してどの程度になつてゐるであらうか。

物價の實情を述べるに先立つて、本年三月の分類別指數(第五表)を事變前年二〇〇に換算してみれば、左の如き指數となる。

同	五月	一五四・一九	一九七・五〇	一三七・一〇	二七・九一	一四四・三
同	六月	一五六・三一	二〇三・九六	一三八・九八	二九・五一	一四四・八二
同	七月	一五八・〇一	二〇六・七一	一三八・九八	三四・二八	一四五・六一
同	八月	一五九・一九	一五八・八六	一三八・九八	三六・五一	一四五・八六
同	九月	一六四・七〇	一六八・七一	一三九・一三	三六・五一	一四九・七五
同	十月	一七五・七三	一七六・三七	一五八・七七	三九・〇四	一五〇・〇五
同	十一月	一七八・四三	一八〇・二六	一五七・九八	三八・九二	一五六・〇五
同	十二月	一八四・九四	一九四・八一	一五七・九八	六六・九〇	一六二・〇五
同	一九四〇年一月	一八四・五四	一九三・五六	一五九・三三	六七・九三	一六一・九一
同	二月	一八八・八七	二〇二・六八	一六一・二四	六二・三一	一六六・三三
同	三月	一九四・九一	二〇八・二四	一六二・二四	六一・一九	一六九・〇三

右の數字をみると特産と金物の指數が意外に低いことに氣が付く。これは特産が事變前年に既に獨り高水準に達してゐたこと、昨年十一月以來大豆を皮切りとして特産に公定價格が設定されたために、昨年十月を最高として反落したこと、この二つの理由によつて特産の事變前年比勝貴率が低率となつてゐるのであり、また金物は事變後一九三八年六、七月まで急勝したが統制の強化によつて反落に轉じ、昨年四月以來は公定價格によつて指數が釘付けにされて、事變直前よりも寧ろ低位にあるといふ現象を呈してゐるのである。従つて特産と金物を除外してみれば、前記の公表數字に基いて計算しても、その他の物價は三月に既に事變前年の二倍三分近くに勝貴してゐるのである。

II 物價の實情

滿洲國で現在價格を統制されてゐる商品は左の如くである。

(イ) 專賣品

鹽、酒精、燐寸、石油類、麻藥類、小麥粉及代用粉

(ロ) 公定價格品

小麥、煙草、綿糸、生地綿布及加工綿布の一部、大豆、豆粕、豆油、蘇子、高粱、玉蜀黍、粟、粳、十七都

雜品	二九五・二	食料及嗜好品	一八五・三
織品	二九二・〇	燈火及燃料	一七三・〇
紡織品	三二一・一	金物	一六五・九
建築材料	一九五・二	特産物	一五三・五

市の主要食料品（糶詰、醤油、酒等）、麻袋  
配給統制乃至價格統制下にある商品

鐵鋼類、鑛類、鐵線材類、鑄管類、化學藥品類、非鐵金屬類、石炭、硫安、曹達、セメント、棉花、木材、  
柞蠶糸、原毛、毛皮及皮革、砂糖、ゴム靴、軍手、地下足袋、協和會服及服地、運動靴、茶、澱粉、鹽鮭、  
鹽鱈、昆布、赤煉瓦等

内地に比べれば品目は少いが、價格統制は相當廣範圍に及んでゐる。而してその統制價格は次のやうな方法によつて算出統制されてゐる。

(a) 農 産 物

特産、雜穀等の農産物は概ね公定價格品に屬する。生産農家について選擇調査した生産費を基礎として、大豆等の輸出商品は輸出採算に基いて決定されてゐる。しかしながら北滿と南滿とでは生産費に於て著しい開きがあり、又輸出採算點と生産費との間にも喰違ひが生ずる場合があり、この點に統制價格を破綻せしめる原因が潜んでゐる。

(b) 生 産 財

建國以來重工業部面では特殊會社によつて一元的統制を行つてゐるため、生産部面では價格を抑えることが出来るから、生産財の統制は徹底してゐる。昨年特殊會社に對する特別監事制度を施行し、低價格政策を強行してゐる。

(c) 生活必需品

昨年二月生活必需品配給會社を設立し、同年五月當時の市場價格を指定して標準價格とし、同年十一月に十七都市の主要食料品につき公定價格を決定、生活必需品會社の價格と市場公定價格とを併用してゐる。

價格統制を完遂するには結局統制組織の問題が根本的であるが、此處では觸れないことにして、表面に現はれた事實より見るならば、右の價格算定の基礎からも窺はれる如く、滿洲國では生産財に關しては開相場が比較的少いとみてよいやうである。鐵鋼その他は生産點に於て押へられてゐるばかりではなく、配給行程に於ても日滿商事の一元的統制下に置かれてゐる。また機械類についてみても昨年八月以來對日重要物資發註統制規則が施行されて價格を統制して來てゐる。従つてこの發註證明以外のものは、現在でもなほ相當の高値で取引されてゐるとはいへ、その數量は僅少であるから、生産財に關する限り開相場はそれ程大きく評價する必要はない。しかしそれは重工業生産財についていはれることであつて、土木建築材料に關しては、一元的統制が徹底せず、またその販賣先も廣いので需給の窮屈と共に、かなり開取引が行はれてゐる模様である。統制價格一圓六十錢のセメントが奉天では八圓内外、安東では十八圓といふ高値で取引され、釘は極度の品薄から一樽二百圓甚しきは五百圓といふ法外の値を呼んでゐる。

次に特産についてみれば、滿洲土産品の大宗たる大豆の統制が滿洲の重大問題となつてゐることは衆知の通りである。大豆は昨年十月特産專管公社が設立され、十一月一日から大連渡百斤七圓一本建の公定價格が實施された。しかしこの時大豆製品たる豆油、豆粕の統制が並行して行はれなかつたため、專管公社の手に入つたものは

意外に僅少であつた。そこで本年一月十日大豆油大連渡百斤二十三圓、豆粕大連渡百斤三圓二十錢の公定價格を決定し、二月十八日には大豆の收買價格を八圓五十錢に引上げた。大豆は滿洲國の主要輸出品である關係上、輸出採算點に基いて收買價格が決定されたのであるが、大連渡の運賃一本では、大連迄の運賃を差引く場合北滿生産者の手取金は著く低い價格となる。しかも一方豆油は、輸出採算點は二十圓前後であるが、國內では四十圓位で賣れた處から、産地の油房は大豆を高値に買取つても決して損はなかつたのである。公定價格七圓の際に、二十圓乃至二十三圓といふ高値さへあつたといはれてゐる。これには又日本の公定價格が横濱渡百斤十圓となつてゐたにも拘らず、需給逼迫から相當の高値取引が行はれてゐた關係上、内地の公定價格引上を待望して出し渡つてゐたことも與つてゐるやうであり、また北支の物價高につれて同地で大豆が二十五、六圓に昂騰したため、水の低きに流れる如く、ジャンクにより或ひは長城を越えてかなり多量の豆が北支へ流出したことも、開相場を激成してゐた。豆粕も三圓二十錢の公定價格に對して三圓八十錢乃至四圓の開相場が行はれてゐた。

しかし統制の強化と出廻の一巡につれ、大豆の開取引も漸減し、最近では一部には高値の開相場があるにはあるやうであるが、その取引量は僅少になつた。たゞ注意すべきは、統制の抜け道であつて、大豆を他の豆と混合して雜大豆とし、豆粕は統制外の小豆粕として出すやり方がかなり行はれてゐるのではないかと考へられることである。

消費財についてみれば、滿洲に於ける消費財は日本に依存する處大いだけに、日本の價格騰貴を反映して値上り大きく、また開域輸出調整令の影響もあつて物資不足甚しいために、開取引は最も激しいやうである。個々の例を

あげる餘裕はないが、或る種の商品は資力のある滿人商人の手に高値で引取られて、日本人の手になかく渡らないといふやうなものもある。綿布類は滿人にどつて唯一の衣服であるから、この品拂底は法外の闇を生んでゐるやうである。會社の購買組合で配給された品が、翌日には城内で十五圓の品に二十圓もプレミアムをつけて賣られてゐるといはれ、また味ノ素（小罐）も一圓二十錢の品が四圓を唱へ、一個十四錢のマーキユラー（煙草）が奉天の城内では三十錢で賣られてゐる。以上は極く一部の小賣商品についてであるが、綿糸布等の衣服類や食料品等は、品不足と統制の徹底し得ないこと等によつて、相當大きな開相場が行はれてゐると云ひ得る。

いさゝか枝葉に立入りすぎたが、滿洲國に於ては消費財の開相場最も大きく、次いで特産にかなり行はれ、生産財に關しては比較的尠いと考へられる。これを綜合するに、滿洲の卸賣物價指數は、中銀指數では事變前年を一〇〇として本年四月が二二・一であるが、開相場を斟酌するならば實際の卸賣物價は二四〇乃至二五〇位に騰つてゐると認めて差支へないであらう。即ち事變前に比し二倍半に騰貴してゐると思はれる。

## (二) 物價騰貴の諸原因

### I 一物資不足と通貨膨脹

滿洲國に於ける物價騰貴が、産業開發五ヶ年計畫の進捗、國防充實の強化に伴つて惹起された物資の大需要に基因することは明かである。これによつて相當巨額の産業資金が放出されたが、國內の生産力はそれに相應するだけには未だ擴充されてゐない。産業開發五ヶ年計畫の進行中に、支那事變のため昨秋から日本よりの對滿物資供給は制限され、更に歐洲戦争の勃發によつて、獨逸からの機械類の輸入は杜絶し、工業建設資材の殆んど全部

を日本と獨逸とに仰いでゐた滿洲國としては工業建設の進行を阻げられること頗る大きく、今一步といふ處で建設が停滯してゐるといふ例も幾多ある。滿洲國では工場設備の三分二が遊んでゐるとさへ極言するものもあるのは、建設途上に於ける右の如き物資不足の結果に外ならない。かくして増大せる物資の需要に對して、物資の供給は相對的に不足を告げ、此處に絶えず物價高が醸生されるのである。また産業開發五ヶ年計畫の進行につれて、滿洲國の人口も急増し、消費財の需要が激増したが、同計畫が生産財生産の建設に重點を置いてゐるために、消費財の生産は低位に止まり、ために消費財は最も昂騰を告げるに至つてゐる。更に昨年あたりは、後述の如き北支への物資流出といふ現象さへ起つて一段と物資の不足に拍車をかけてゐた。かゝる物資需要の増大は購買力の膨脹に對する物資の不足乃至缺乏こそ、滿洲國物價騰貴の根本的原因である。

物資關係については數字的資料も持たないし、また論すべきではないと思ふので、これ以上立入らないが、購買力増大の一指標とみられる通貨に關して簡単に觸れて置きたい。滿洲國々幣の發行高は第八表に示す如く、年中に於ける増發は頗る顯著であつて、特に十一月以來の激増は驚くべきものがある。一九三六年平均發行高に對して、昨年六月には二倍三分であつたのが、十二月には三倍七分へと増大してゐるのである。本年に入つてからの物價暴騰をみる場合に、昨年末に於けるこのやうな通貨急膨脹と關聯させて考へることは、果して當を得ない觀察であらうか。

第八表 滿洲中央銀行券平均發行高

買 入 指 数	買 入 指 数		買 入 指 数	買 入 指 数	
	一九三五年	一九三六年		一九三五年	一九三六年
一九三五年	一三六、五二二	八五、六	同	九月	四〇五、三二八
一九三六年	一五九、四八〇	一〇〇、〇	同	十月	四二九、四二六
一九三七年	二二一、五七〇	一三二、七	同	十一月	五〇四、一四四
一九三八年	二八八、四四六	一八〇、九	同	十二月	五九四、二五八
一九三九年	四二八、三一九	二六八、六	同	一九四〇年一月	六〇三、二七七
同	四〇九、六一五	二五八、八	同	二月	六一五、七二五
同	三八一、九七一	二二九、五	同	三月	三六六、一
				四月	一七六、〇
				五月	二六九、三
				六月	三一六、一
				七月	一八三、三
				八月	一八六、九
				九月	一八九、二
				十月	一九六、五

II 輸入品、特に日本品價格の昂騰

滿洲では、産業開發資財並びに消費財が殆んど全部海外に依存してゐる状態にある關係上、輸入品價格によつて滿洲國物價の變動が左右されてをり、日本物價高の影響が大きいといふことが屢々いはれてゐる。滿洲國産業開發五ヶ年計畫は、建設資財を殆んど全部海外、日本と第三國では獨逸に仰いで來た。日本からの物資供給は昨秋の區域輸出調整令によつて、制限を受けることになつたが、一方歐洲戰爭の勃發によつて、獨逸からの輸入は杜絶状態になつたため、日本に對する依存度は益々高くなつて來てゐる。即ち滿洲國の日本からの輸入は、昭和十二年六億六千六百萬圓、昭和十三年九億九千三百萬圓、昭和十四年には十五億四千萬圓と激増し、その輸入總額中に占める割合は、昭和十二年に七五・一%であつたのが、昭和十三年には七七・九%、昭和十四年には八四・八%となつてゐるのである。滿洲國の經濟が海外よりの輸入品に頼る處大きく、而かもその八割五分は日本商品によつて占められてゐるのであるから、日本商品の輸入價格が注目されるのは當然であつて、日本商品は九・一



八價格統制下にあるに拘らず、滿洲に於ける物資不足と絡み合つて著しく騰貴し、滿洲國の物價騰貴に有力なる一原因となつてゐたといふのである。

果して左様であるかどうかを、少しく数字についてみよう。第十表の國內品、輸出品、輸入品別指數をみれば、三類中では常に輸出品指數が高位にあるが、これを事變直前（資料の關係上事變前年ではなく、事變勃發直前の一九三七年六月）に換算してみれば、左表の如き數字となる。

第九表 滿洲國類別物價指數

滿洲中央銀行調査（一九三九年六月一〇〇）

國內品	輸出品		輸入品	
	一九三七年六月	一九三九年六月	一九三七年六月	一九三九年六月
同	一〇二・七	一〇二・七	同	同
一九三八年三月	一一〇・三	九六・六	同	同
同	二〇・四	一一五・四	同	同
同	二五・三	一〇六・六	同	同
同	二八・四	一〇一・九	同	同
一九三九年三月	一三五・四	一一九・四	同	同
同	一五二・三	一三八・二	同	同
同	一五〇・八	一五〇・八	同	同

これによつてみれば、一九三八年春以來輸入品が群を抜いて騰貴し、正に滿洲に於ける物價騰貴の口火を切つたことが窺はれる。この輸入品の昂騰が波及して、昨年春には國內品が、秋には輸出品が急騰して、現在では輸入品よりも寧ろ國內品の方が高位にあるが、昨年上半期までは一貫して輸入品價格の昂騰が物價高をリードして來たのである。これはさきの滿洲國貿易中に占める日本の壓倒的地位を考へれば、日本の品の昂騰に基づくものと認めざるを得ない。日本の區域輸出は價格の統制を受けてゐる筈であるが、現在の統制機構の下では幾多の抜け道があつて、事實上輸出價格の統制は相當ルーズな状態にあるやうである。即ち滿洲の側からいへば、滿洲の日本向輸出品は日本側の價格統制を受けて値を押へられてゐるにも拘らず、日本からの輸入品價格は滿洲の物資不足に助長されて昂騰の一途を辿り、滿洲國の物價政策を擾亂してゐるといふのが滿洲國側の言分である。この事實は圓ブロックの物價問題を論ずる場合注目されなければならない。滿洲に於ける日本よりの輸入品價格の昂騰については、左の一文を參考として引用して置きたい。

「昭和十四年に於ける我が對滿輸出商品に就き、その價格と數量との單純算術平均價格に徴すれば、各商品は例外なくその單價の昂騰を示し、就中前年に比較し昂騰の著しきは人絹織物の九二・七%、綿織物の五〇%、精糖の四七・一%、水産物の三七・三%等がある。」  
（三菱經濟研究所「本邦世界情勢」昭和十五年六月號四〇頁）

III 北支への物資流出

北支の物價騰貴に基因する諸物資の北支方面への密輸出も、最近では尠からざる重要性を持つて來てゐる。滿洲から北支への密輸出増の原因は、云ふまでもなく國幣と聯銀券とがバーで聯繫してゐるにも拘らず、北支の物價が物によつては、滿洲の二倍三倍に達してゐることである。即ち滿洲國の公定價格に比し穀類は二倍乃至三倍、阿片・豚毛は五倍金は四倍、余といふ高値を唱へてゐるから、陸續として長城を越えて物が流れて行くのである。元來熱河省の北支境界地域は北支經濟圏に属してゐたのであるが、滿洲事變によつて滿洲に編入された關係上、北支との通路は無數にあり、萬里長城の破壊口は四百數十といはれ、少くとも百四十ヶ所の密輸口が

存在してゐる。これに對して税關監視所は僅か數ヶ所にすぎないので、密輸網は全滿に張り回され、滿洲各地で蒐荷された商品は鐵道、馬車、ジャンク等によつて一應國境地帯の據點に集中され、更に駱駝、驢馬、携行等の方法によつて長城線を突破して北支に密輸出されてゐる。そのルートは奉天、綿縣、通遼等を経て、凌源、平泉、下板城、遼平等から更に國境の突破個所に向ふのであつて、密輸品目としては、阿片、金、豚毛等の容積小さく高價な商品ばかりではなく、穀類等にまで及んでゐる。金の密輸出に關しては、別項として報告するが、その金額は最低に見積つても五百萬圓を下らず、恐らく二、三千萬圓の巨額に達してゐるであらう。阿片は栽培地帯が北支に近づくに密輸は最も盛んで、北支への流出額は六千萬圓に達してゐるさへ推定されてゐる。豚毛は上記のルートによる外、入滿苦力が歸國の際滿洲の綿の中に隠して行くのも相當あつて、北支向密輸出額は五、六百萬圓と推算されてゐる。雜穀の密輸出は北支の食料不足、價格昂騰、滿洲に於ける公定價格の實施によつて、昨秋來特に活潑となり、苦力は長城を越えて麵粉、大豆等を半袋密輸出しても一日の口當になるといはれる状態であるから、堂々とトラック、大車で運ぶ大規模のものから、小は携行に至るまで密輸出は絶えない。これに關しては、密輸出の一據點となつてゐる平泉及び凌源兩驛に到着した糧穀數量が、一九三八年九月—三十九年三月の半年間には約八千八百噸にすぎなかつたのが、三十九年九月から本年三月に至る半年間には、一躍五萬六千噸に激増してゐる一事によつても、その盛行を窺知することが出来る。但し糧穀は、出廻一巡と共に、統制強化のため極く最近では漸次減少を辿つてゐる模様である。

かくの如き密輸出激増の結果は、さらだに不足せる滿洲國の物資欠乏に拍車をかけ、金の流出は滿洲國の産

三三

金買上額を激減せしめて、第三國からの輸入能力を削減し、また通貨不安激成の一原因ともなるのである。しかもこのやうな北支向密輸出激増は、前記國境地帯に聯銀券を氾濫させることとなり、滿洲國の貨幣制度自體を脅かすのである。西南國境地帯には、甚しきは聯銀券が流通通貨の八、九十パーセントを占めてゐた縣さへ存在し國境地帯に流通してゐた聯銀券は一時二、三百萬元に及んだといはれてゐる。今春來滿洲中央銀行の聯銀券回收工作により漸次減少して來たが、更に過般滿洲國は聯銀券の國內流通を禁止した。しかし物價の間に著しい開きが存在してゐる以上、北支向密輸出は滿洲國にとつて重大問題として残るであらう。

#### IV 換物人氣

滿洲では相當廣汎に物價統制が行はれてゐるので、北支に於ける如き狂暴な物價騰貴は抑制されてゐるものの物資特に消費財の絶對的不足に直面してゐる。滿洲では建國前歴々通貨價值の下落を経験し、滿洲事變直前のインフレーションなど實に激しいものであつたが、未だ嘗て今日のやうな物の絶對的缺乏を経験したことがないといふ聲を耳にする。それだけ滿人間の不安は大きいのであつて、商人その他富裕なる滿人間の間では、既に換物運動が活潑に行はれてゐる。彼等は公定價格を無視してごし／＼高値で品を引取つてゐるので、日本人の店にはない品でも滿人の店にはあり、しかも日本人には賣らないといふ話も屢々耳にした。換物人氣が物價騰貴を導くことは今更云ふまでもないことであつて、本年に入つての物價暴騰には舊正前後の換物思惑が相當影響してゐると思はれる。

このやうな換物人氣の擡頭は、通貨に對する不安を表明するものであつて、奥地農村に於て物々交換が行はれ

三三

また甚しきは因幣建ではなく銀兩建の取引が行はれ始めてゐるといふ噂の如きは、その端的な表現である。またそのやうな取引が普遍化してゐるとは認められず、極く一小部分の現象にすぎないであらうが、物々交換と共に注目されなければならない。

四、北支

(一) 各地物價騰貴の現状

A 天津

北支の経済的中心地天津についてみるに、支那問題研究所の天津卸賣物價指數(一九二六年1100)は、昨夏以來騰勢を強め、特に本年の舊正前後から一段とその勢を激化して、本年一月の三四六・一八が二月には四〇

第十表 天津卸賣物價指數(支那問題研究所調査) (第一分組) (一九二六年1100)

年	食糧	衣服及其原	金	建築材料	燃料	雜項	總指數	因幣購買力
一九二七年	一〇六九五	九九九六	一〇一三三	九九〇四	一〇一五二	一〇八二一	一〇三〇三	二九三
一九二八年	一一〇七	一〇三三	九九五	一〇三八	一〇〇一	一〇七	一〇七九	七五元
一九二九年	一一六三三	一〇七五	一〇四六三	一〇四三	一〇七	一〇七	一〇七八	六九七
一九三〇年	一二七三	一〇三七六	一〇三六七	一〇四三	一〇六	一〇六	一〇五八	三六八
一九三一年	一四九元	一七〇三	一四三三	一六八八	一三九	一三九	一三三	一八四〇
一九三二年	一〇八五	一〇七五	一一〇七	一一二九	一一〇	一一〇	一一〇	一〇〇元
一九三三年	九八六	九七八	一一一八	一一二九	一一〇	一一〇	一一〇	一〇〇元
一九三四年	七五三	九〇七	一〇五〇	一〇六三	一〇九	一〇九	一〇九	八九六

一九三五年	九四九	八六六	九九〇	一〇三六	一〇四〇	一〇八〇	九五三	四八〇
一九三六年	一一六〇	九九〇	一一六四	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	九九六
一九三七年	一一七五	一一七九	一一八五	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二九九
一九三八年	一一五三	一一四九	一一四七	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
一九三九年	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
一九三九年一月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
二月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
三月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
四月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
五月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
六月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
七月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
八月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
九月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
十月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
十一月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
十二月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
一九四〇年一月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
二月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
三月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
四月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八
五月	一一七五	一一八八	一一八〇	一一〇七	一一〇	一一〇	一一〇	二六八

備考 調査品目一〇六種、單純幾何平均指數、因幣購買力は一九二六年平均を一〇〇としその増減を%にして表せるもの。

第十二表 天津工入生活費指數(支那問題研究所調査) (銀元物價計算)(一九二六年—一〇〇)

時期	食糧	衣服類	燃料及水	住家	總指數
一九二七年	一〇七・八二	一〇〇・一〇	一〇二・〇三	一〇二・四五	一〇五・六〇
一九二八年	一一一・六八	一〇五・六四	一〇五・七八	一〇五・六九	一〇九・五一
一九二九年	一一七・二七	一〇七・九九	一一一・七四	一〇七・七三	一一一・六七
一九三〇年	一二〇・四九	一〇六・三九	一一二・一七	一〇七・五三	一一一・八一
一九三一年	一一〇・三八	一〇六・二四	一一三・二八	一〇六・三三	一一一・八一
一九三二年	一〇一・九八	一一一・二四	一一一・二五	一〇四・六一	一〇五・二四
一九三三年	八八・七〇	九一・二七	一〇〇・〇七	一〇三・八七	九二・四八
一九三四年	八三・八二	八六・八一	一〇一・三九	一〇三・八七	八九・七〇
一九三五年	九八・四四	八二・七九	一〇四・二〇	一〇二・八九	九九・〇二
一九三六年	一一一・九〇	八七・八〇	一一一・五〇	一〇七・五〇	一一一・二二
一九三七年	一三四・一二	一〇一・一八	一一九・四六	九七・四七	一一三・四一
一九三八年	一七八・五五	一三〇・六九	一四〇・四九	一〇〇・四五	一一六・八一
一九三九年	二九七・六七	二〇五・三六	二〇一・七七	一二五・五四	二四九・七二

第十一表 天津卸賣物價指數(支那問題研究所調査) (第二分類)(一九二六年—一〇〇)

時期	農産品	動物産品	林産品	礦産品	原料品	生産品	消費品	製造品	總指數
一九二七年	一〇三・五一	一〇三・四五	一〇八・七九	九九・九三	一〇四・三三	九七・三三	一〇五・五五	一〇三・一一	一〇三・〇〇
一九二八年	一〇三・三三	一〇三・四四	一〇四・六三	一〇五・〇〇	一一〇・一八	一〇〇・〇〇	一〇五・〇〇	一〇六・二六	一〇七・九一
一九二九年	一〇六・七五	一〇六・六三	一〇八・〇三	一一〇・五九	一一一・五九	一〇五・九〇	一一〇・三三	一一〇・八一	一一一・八八
一九三〇年	一〇六・八二	一〇七・〇三	一一〇・三三	一一〇・三三	一一〇・四六	一一〇・四六	一一〇・三三	一一〇・八一	一一一・八八
一九三一年	九八・七四	一〇八・七三	一一〇・七九	一一〇・七九	一一〇・六二	一一〇・六二	一一〇・三三	一一〇・八一	一一一・八八
一九三二年	八九・七三	九六・七三	一一〇・〇五	一一〇・〇五	九七・一九	一一〇・五九	一一〇・三三	一一〇・八一	一一一・八八
一九三三年	七三・〇三	八三・三二	一一〇・六三	一一〇・六三	八三・三〇	一一〇・六三	一一〇・三三	一一〇・八一	一一一・八八
一九三四年	六四・三三	七六・五一	一一〇・五八	一一〇・五八	八三・三〇	一一〇・六三	一一〇・三三	一一〇・八一	一一一・八八
一九三五年	八二・九二	七六・五一	一一〇・五八	一一〇・五八	八三・三〇	一一〇・六三	一一〇・三三	一一〇・八一	一一一・八八
一九三六年	一〇一・九〇	九八・九〇	一一〇・七〇	一一〇・七〇	八三・三〇	一一〇・六三	一一〇・三三	一一〇・八一	一一一・八八
一九三七年	一〇三・五一	一〇三・四五	一一〇・七九	一一〇・七九	八三・三〇	一一〇・六三	一一〇・三三	一一〇・八一	一一一・八八
一九三八年	一〇三・五一	一〇三・四五	一一〇・七九	一一〇・七九	八三・三〇	一一〇・六三	一一〇・三三	一一〇・八一	一一一・八八
一九三九年	一〇三・五一	一〇三・四五	一一〇・七九	一一〇・七九	八三・三〇	一一〇・六三	一一〇・三三	一一〇・八一	一一一・八八

二八

同	一月	一九六・五五	一三八・六八	一〇二・三六	一六八・二六
同	二月	二〇九・〇一	一四〇・七〇	一〇二・三六	一七七・〇六
同	三月	二二四・二〇	一五一・二六	一〇二・三六	一八九・六九
同	四月	二二五・九五	一六七・三七	一〇二・三六	一九一・五二
同	五月	二三一・六一	一九三・八四	一〇七・三六	一九七・七一
同	六月	二三四・七五	一九四・二六	一一七・一三	二〇二・四二
同	七月	二四六・七五	一一一・五六	一二二・〇五	二二一・七九
同	八月	二二八・七二	二二九・六八	一二二・〇五	二二七・三六
同	九月	三四六・八二	二六〇・六六	一四七・六四	二九五・六二
同	十月	三四九・七三	二五八・〇一	一四七・六四	二九七・八五
同	十一月	三四七・七三	二八九・六九	一四七・六四	二九九・五五
同	十二月	三五八・七六	三一一・八四	一七二・二四	三一一・三〇
同	一九四〇年一月	四一九・二六	二八五・八二	一七二・二四	三四九・八二
同	二月	五一七・九二	三一〇・六五	一七二・二四	四二二・九九
同	三月	五二五・六九	三二七・四九	一七二・二四	四二七・二〇
同	四月	五六二・九七	三三六・七四	一九五・九六	四四九・四三
同	五月	五六一・七八	三三六・七四	一九六・八五	四六〇・三七
備考	一九二七年九月より一九二八年六月まで天津二四〇工人家庭の生計費調査の結果一三三戸を選出し、その各戸にて比較的消費量多き物品三七種を指数中に入れたるもの。				

三・九六と躍ね上り、四月には四四一・五六と昂騰してゐる。更に五月初の法幣の第五次崩落の影響を受けて、五月第二週には四八九・二四と文字通り激騰し、その後稍々反落を見たが五月全月の指数は四八二・二三を示し、北支の物價問題を彌が上にも重大ならしめてゐる。五月の指数は昨年末に比較すれば、五〇・一%の騰貴に當り、前年五月に比すれば一一・二・四%の騰貴となり、一年間に二倍以上に昂騰してゐる。更にこれを事變前年を基準

とすれば、第一表に示されたやうな足取りを経て、本年一月には三倍を越え、瞬く間に四月には三九九・一と四倍に迫り、五月には四三五・九と四倍半に垂んとしてゐる。日本、滿洲の物價を見て来た眼には、かくの如き物價の激動は一應疑惑を以て映するのであるが、支那問題研究所の指数は、致人の支那人調査員をして日市内の商店を調査せしめて作成してゐるものであり、また北支では若干の商品の邦人に對する配給と、軍の買付品とを除けば、事實上物價統制は行はれてゐないのであるから、右の指數をもつて大體同地の物價變動の實相を示すものとして、割引なしに受取つて差支へないを倍する。

五月の指數につき、商品類別に事變前年を一〇〇として算出してみれば、右の如く金屬が七倍を越えて最も騰貴激しく、次いで衣服及原料が五倍半に達し、食糧が四倍に垂んとしてゐる。

食糧	三八四・七	燃料	三〇三・八
衣服及其原料	五五七・一	雜項	四二・三
金屬	七二八・三	總指數	四三五・九
建築材料	三五七・一		

これをまた原料品、製造品の二大類別(第十一表参照)よりみれば、農産品、動物産品、林産品、礦産品を含む原料品は、事變前年を基準として五月には三七六・〇であるのに對して、生産品、消費品を含む製造品は四七八・三を示し、製造品と原料品との間の甚しい價格の開きが存在してゐることを物語つてゐる。昨年十二月と對比してみても原料品の騰貴が三六・〇%であるのに、製造品は五九・四%騰貴してゐる。この事實は最近北支では食料問題が喧しくなつてゐる状態であるにも拘らず、主として海外(日本)に供給を仰ぐ工業製品が常に物價騰

貴をリードして、原料品と工業生産品との間の価格差を益々拡大しつつあることを示してゐる。これには棉花、羊毛、麻、毛皮、皮革、石炭等前記の原料なる項目に属する北支の主要物産の買付価格が低く押へられてゐることが相當大きな要因となつてゐると思はれるが、説明は加へない。

B 北 京

北京の卸賣物價に關しては昨年五月以降中國聯合準備銀行調査の指數が公表されてゐる。九七品目に關する單純算術平均指數であるが、一九三六年平均を一〇〇とする同指數は本年三月に三八一・〇三を示し、同基準に換算した天津の指數とは同水準にある。北京は商業都市ではない關係上、天津に比すれば従來物價の動きは緩慢で、本年一月頃までは天津の指數よりかなり下廻つてをり、同月には二八・三の開きを示してゐたのであるが、二月以來北京の物價は急激に騰勢を強めて開きを縮少し、三月には僅か三・八方下廻るのみとなつた。これは舊正前後より北支の物資缺乏、通貨不安が激化し、換物思惑が普遍化し、従來比較的鋭敏を缺いてゐた北京の物價にまで波及して來たことを物語るものではないかと考へられる。商品類別にみれば、北京でも金屬類最も高く、ついで米類雜穀、布疋及其原料、建築材料の順となつてゐる。

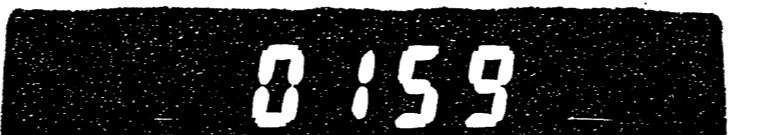
北京に關しては四月以降の指數を入手してゐないが、右の如き動きからみれば、五月の指數は大體天津と同水準と見てよいであらう。

第十三表 北京卸賣物價指數 (單純算術平均)

中國聯合準備銀行調査 民國三五年(一九三六年)平均一〇〇

一九三九年	一月	總指數		米類雜穀		其他食品		布疋及		金 屬		燃 料		建築材料		雜 項	
		九七品	三五品	一六品	一七品	六品	九品	八品	六品								
同	二月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								
同	三月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								
同	四月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								
同	五月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								
同	六月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								
同	七月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								
同	八月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								
同	九月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								
同	十月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								
同	十一月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								
同	十二月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								
同	一九四〇年一月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								
同	二月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								
同	三月	193.96	184.35	164.44	201.11	327.7	175.9	170.00	330.11								

青島の物價指數、は青島日本商工會議所によつて、邦商卸賣物價指數と華商物價指數とが作成されてゐる。邦商卸賣物價指數は七五商品に關する算術平均指數であるが、昭和九年(一九三四年)一月を一〇〇とする同指數は、第十四表に表示する如く、昨年來からの騰勢顯著で、二月には三六九・〇となつて、昨年十二月に比し六



四・六の騰貴率を示してゐる。同一期間に於ける天津の騰貴率二五・五%を遙かに凌駕してゐるが、これは主として

第十四表 青島卸賣物價指數

青島商工會議所調査 (昭和九年一月一〇〇)

品名	昭和十四年一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	昭和十五年一月	二月
穀類及嗜好品類	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
調味品類	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
魚肉類	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
食料品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
六品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
七品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
八品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
九品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
十品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
十一品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
十二品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
十三品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
十四品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
十五品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
十六品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
十七品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
十八品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
十九品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
二十品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
二十一品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
二十二品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
二十三品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
二十四品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
二十五品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
二十六品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
二十七品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
二十八品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
二十九品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
三十品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
三十一品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
三十二品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
三十三品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
三十四品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
三十五品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
三十六品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
三十七品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
三十八品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
三十九品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
四十品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
四十一品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
四十二品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
四十三品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
四十四品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
四十五品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
四十六品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
四十七品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
四十八品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
四十九品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七
五十品	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七

から二月には三九一・九と奔騰し、事變前年に比し約四倍となつたことを示してゐる。三月以降の指數は不明であるが、同地について調査した處によれば、三月はほぼ保合ひ、四月には約一割方騰貴し、更に五月に入つては

第十五表 青島市華商物價指數

青島日本商工會議所調査 (昭和十一年四月一〇〇)

品名	昭和十五年一月	二月	昭和十五年一月	二月
糧食類(四品)	三二八九	四二一九	皮革類(三品)	四三〇・三
菜蔬類(五品)	四〇八八	五七五三	衣料類(四品)	三三二・五
果實類(九品)	二八四八	三二七四	建築類(八品)	三六四・一
鶏肉類(五品)	二二八四	二八六八	燃料類(六品)	二二〇・七
魚類(〇品)	二四四〇	二四五八	總指數(八二品)	三二六・四
調味類(八品)	二九二九	三九七四		

法幣暴落に際して、土産物類まで一齊に躍進してゐるから、五月の物價は當然事變前の四倍乃至四倍半に達してゐるものと推測される。

たゞ事變以來の騰貴を見る場合忘れてはならないことは、事變前京津地方には冀東特殊貿易によつて廉價な商品が流込んでゐたために、京津地方が當時支那でも低物價地域を形成してゐた事實であつて、當時は北支の中でも京津地方と青島との間にはかなりの物價の開きが存在してゐたのである。従つて事變以來の騰貴率は、此處では京津地方より幾分は低いのではないかと考へられる。

三三  
 濟南には旅程を伸ばすことが出来なかつたので、實地につき調査することを得なかつたが、若干の資料を入手することが出来たので簡単に觸れて置きたい。

同地ではまだ物價指數は作成されてゐないが、濟南日本商工會議所で重要商品に關して價格指數を作成してゐる。それによつてみるに、本年三月の價格は事變前年を100とすれば、鐵管最も高く十倍を越え、麻袋七一八、

第十六表 濟南重要商品卸賣價格指數

濟南日本商工會議所調査 (昭和九年平均=100)

品名	昭和二年	昭和三年	昭和四年三月	昭和四年六月	昭和四年九月	昭和四年十二月	昭和五年一月	昭和五年二月	昭和五年三月
高粱	一五七	一五七	一五七	一五七	一五七	一五七	一五七	一五七	一五七
落花生	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
小麦	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
粟	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
麵粉	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
棉花	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
鶏卵	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
綿糸	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
綿布	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
麻袋	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
石油	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
鐵管	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

高梁五五〇、粟四九六、麪粉四六七、落花生四五四、綿糸四四二等の順となつてゐる。しかし第十六表を些細に検討するならば、舊冬來土産品の騰勢が輸入品の騰勢を追い越してゐることに氣付くであらう。これは近來物

資缺乏が激化して輸入の必要が更に昂まつて來たのに對して、或ひは輸入品の高値につれて行はれた思惑的輸入の決済のために、土産品に對する需要が増大して、値が昂上げられて來たことが原因してゐるのであらう。かくの如き土産品の昂騰が青島の物價に反映してゐたことは、既に見た通りである。

さきに天津に於ては原料品に比し工業製造品の値上りの急なること、所謂鉄狀價格差が擴大しつゝあることを指摘して置いたが、濟南では最近上記の如く一見反對の現象があるやうに思はれる。資料と研究不充分のため、此處では天津とは全く異つた傾向が存在するとは斷定を下し得ないが、その昂騰のテムボに於て異なるものがあることは認めて差支へないであらう。即ち北支では(中支に於ても勿論)交通機關の未發達と關聯して、その遅れたる經濟機構の故に、先進國に見るやうな國內價格の統一を缺き、地域的にかなり相違した動きを示してゐることが觀取される。

(二) 物價騰貴の諸原因

I 物資の不足

(1) 農業生産の減退

北支に於ては、軍事行動遂行、經濟復興、經濟建設等のために尤大な物資需要が生じてゐるのに對して、物資の生産は減退し、日本からの物資補給も充分でないといふ處に、物價騰貴が胎胎してゐる。

北支の生産に關しては、数字的資料を有たないが、北支の生産中に歴史的な部分を占める農業生産の減退は、歴然たるものがある。その結果は農業生産地帯たる北支の食料品輸入を激増せしめてゐるのであつて、天津一港



三六  
 についてみれば、第十七表の如く、穀物及び穀粉以下食料関係の輸入品額合計は、事變前年には總輸入額の五%にすぎなかつたのが、一九三八年には三四%に激増し、昨年度は實に四〇%を占めるに至つてゐる。

第十七表 天津港食料品輸入高累年表 (單位千金單位)

	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
穀物及穀粉	五二九	七五一	二七、八六四	三九、三八六
糧詰其他食料	二七二	一六三	一、二〇二	二、八五九
果實及蔬菜	二一四	二〇一	一、四五四	二、二三二
魚介及海産品	五〇三	二一八	九八二	一、九一九
糖	一一一	五三〇	三、八五三	九、六六〇
小計 (計A)	一、六三九	一、八六三	三五、三五五	五六、〇五六
總輸入額(B)	三二、一一七	三六、九七三	一〇一、四六〇	一三九、八五〇
AのBに對する百分比	五・〇%	五・三%	三四・八%	四〇・一%

北支の食料輸入の増加は、在留日本人の激増(事變前には六、七萬であつたのが現在では三十萬を超えてゐる)も主要な原因となつてをり、また事變前天津の小麦粉需要の約六割は上海に仰いでゐたのであるから、上海粉の輸入減退を他よりの輸入に求めることを餘儀なくされた事情も考慮しなければならぬ、單價の昂騰も計算に入れなければならぬが、一九三九年の穀物穀粉の輸入が、事變前の七十四倍、前年に比しても四割方増加してゐることは、北支の食料農産物生産が減退してゐることを示すものである。

北支では食料農産物の外、棉花、落花生、煙草等が最も重要な特産物であるが、これらの生産減退も特徴的である、棉花については河北、山東、山西各省及び河南省北部を合せた北支棉花生産高は、事變前年の一九三

六年が四百八十二萬七千擔であつたのに對して、一九三八年は二百九十三萬擔に減少し、昨年は更に少く、百三十一萬五千擔と事變前の三分の一以下に激減し、出廻量は百萬擔を割る状態となつた。

このやうな棉花の減産は、勿論自然的災害も原因してゐるのであるが、昨年度の大減産には經濟的要因の加つてゐることを見逃せない。即ち急激な物價騰貴、特に農民生活必需品の昂騰に比して、棉花の買付價格が低く押へられてゐたために、棉花栽培が非常に不利となり、棉作農民が自家用農作物の耕作に轉じた事實が認められるのである。即ち昨年の棉花作付面積を民國二十三年(一九三四年)に比較すれば、山東省では四〇・二%、山西省では四五・二%、河北省では八〇・%に減少してをり、その外煙草、落花生等の耕作も同様に減少してゐる。これに對して河北省に山西省では、粟、山東省では甘藷、大豆等食用農作物の作付が増加してをり、農民の自給自足化を明瞭に物語つてゐるが、それにも拘らず、自然的災厄その他のために、食用農作物も不作に終り、食料品不足——食料品價格の昂騰をもたらしたのである。

なほ、生産減退の附隨的要因として輸送能力と治安未確保とによつて、物資の出廻りが阻礙されなければならぬ。治安の回復はさて置き、輸送能力の恢復も遅々たるものがある。津浦線、膠濟線兩鐵道の貨物及び旅客輸送能力は、最近では昨年の三倍位に増大してゐるといはれてゐるが、北支農業の主要集散地たる濟南方面では、貨車にプレミアムがついてゐる状態である。

(2) 食料輸入の増大に伴ふ生産財その他物資の輸入減少

一般的に北支自體の生産が減退しても、それが輸入、殊に日本からの輸入物資によつて補はれてをれば問題は

なくなるのであるが、輸入全額は増加してゐるにも拘らず、前項に述べたやうに食料品の輸入が激増してゐるため、生産財その他の物資輸入は相対的に著しく減少し、ために天津の項でみた如き金屬類、衣料類の暴騰を呼び起したのである。

北支の輸出入貿易をみれば、左の如く昨年度は農業生産の減退を反映して輸出が減少したにも拘らず、輸入は激増し、大入超を示現した。(單位千元)

年	輸 入		輸 出		入出超(印出超)
	金額	指數	金額	指數	
一九三六年	一五〇,九〇三	—	一九一,一一一	—	五〇,二〇八
一九三七年	一四五,七九〇	—	二二五,七四〇	—	六九,九五〇
一九三八年	三一九,九八六	—	二五四,五二六	—	六五,四六〇
一九三九年	五七四,五三五	—	二〇〇,八五一	—	三七三,六八四

昨年度の輸入は、事變前の一九三六年に比し二八〇%増加してゐるのであるが、この輸入額中には不生産的な性質の物資も包含されてゐるであらうことも考慮しなければならぬ。また物價の昂騰をも斟酌しなければならない。輸入品物價指數がないので判然しないが、物價總指數をこれに二二六%騰貴してゐるのであるから、一般民需用物資の輸入量が幾許の増加になるか、相當の割引をしなければならぬと思はれる。しかも前記の如く、昨年度には食料品の輸入が著増し、天津では總輸入額中の四〇%を占めるに至つたのであるから、生産財及び消費財の輸入量は非常に減退したことを意味する。天津の輸入額中から金屬及び機械等の生産財を拾つてみれば、第十八表の如くである。

第十八表 天津港生産財輸入高累年表 (單位千元)

品名	一九三六年		一九三七年		一九三八年		一九三九年	
	金額	指數	金額	指數	金額	指數	金額	指數
金屬及鐵產品	五,二七三	—	五,八七三	—	七,一八三	—	一〇,一八八	—
機械及部分品	二,二一九	—	四,二四三	—	七,一三八	—	五,七五〇	—
車輛及船舶	三,一八〇	—	二,六七八	—	二,三七二	—	二,五四五	—
金屬製雜品	一,三三二	—	一,六九八	—	三,三八八	—	四,〇八一	—
小計(A)	一一,九九三	—	一四,四九七	—	二〇,〇三六	—	二二,五六四	—
總輸入額(B)	三三,一一七	—	三六,九七三	—	一〇一,四六〇	—	一三九,八五〇	—
AのBに対する百分比	三七三%	—	三九〇%	—	一九八%	—	一六二%	—

金屬及び機械類の輸入割合は一九三八年から激減して來てゐるが、昨年は一段と割合が低下してゐる。昨年の生産財輸入額は事變前年たる一九三六年に比し九六%の増加に當るが、その間に金屬類物價は二五九%方騰貴してをり、また昨年をその前年と對比してみても、金屬類物價が七三%方騰貴してゐるのに輸入額は僅に一割の増加にすぎない。これは實質的には、生産財輸入が著減してゐることを示すものであつて、農業生産の減退から食料品の輸入増加が必要とされ、ために生産財の輸入がチェックされたことを物語つてゐる。かくの如き生産財の輸入減少は、當然生産財自體の價格暴騰をもたらすと共に、北支の工業生産力の恢復乃至發展を阻害し、一般的な物資不足を結果してゐることも亦發言を要しない。最近に於ける物價昂騰に際して、製造品、殊に金屬類の價格騰貴が最も激しく、物價高をリードしてゐる事實は、右の關係を如實に示すものである。

II 聯銀券の膨脹

以上聊か間接的な材料を通して來て如く、北支ではその農産物が食用、原料用共に生産減退し、それに基

因して生産財その他の物資輸入も減少して、一般的物資不足の状態を招来してゐるにも拘らず、物資需要は軍事行動遂行、経済復興、経済建設等の諸目的のために著しく増大し、ために聯銀券の發行額が増加してゐるのであるから、物價高が激成されるのも止むを得ないといはねばならない。聯銀券の發行高をみるに左表の如くである。

第十九表 中國聯合準備銀行發行高

發行高	前月比増加	
	發行高	前月比増加
昭和十三年十二月末	一六一、九六二	二八、八一七
同 十四年六月末	二六四、一五九	三三、二七四
同 九月末	三二〇、四五八	三二、九〇四
同 十月末	三五一、八三〇	三二、三七二
同 十一月末	三八四、六二四	三二、七九四
昭和十四年十二月末	四五八、〇四二	七三、四一八
同 十五年一月末	四九三、二九五	三五、二五三
同 二月末	四九七、四〇六	四、一〇
同 三月末	五二四、二五七	二六、八五一

今春來聯銀券増發抑制策、通貨收縮政策が強行されたため、二月には著しく増勢が緩んだが、三月には再び相當の増加を示し、四月末には五億五千萬元に達した模様である。聯銀創設當時（昭和十三年三月）北支には約四億元の法幣が流通してゐたと推定されるから、聯銀券の増發額は舊法幣流通額と對比してみて、決して顯著な膨脹ではないやうに見えるし、また右の表に現はれた處では、滿洲國の通貨膨脹に比すれば膨脹率は鈍くさへ思はれる。しかし聯銀券の北方券回収額は、昭和十三年末までに約三千萬元にすぎず、退蔵されたもの及び南下したものを合して、舊法幣に代つた部分は現在發行高の三分一乃至四分一にすぎないであらう。その他の三分二及四分三は、軍及び經濟開發の必要に基いて發行されたものと認められる。しかも北支に於て聯銀券の疏通が擴大

したといつても、なほそれは所謂「點と線」の域を出ること遠いものではない。天津の英佛租界は別としても、北京で一步域外に出れば法幣がまだ流通してゐる状態である。従つて舊法幣に完全に代位したものとすれば、さしたる増發ではないが、右の如き條件を考慮すれば、通貨膨脹の事實が認められるであらう。

なほ最近に於ける聯銀券増發の一因として、北支から滿洲への出稼苦力の移送金、持歸金の増加があげられてゐることを附記しておく。滿洲國の産業開發計畫の進行につれ、滿洲に於て苦力の需要が昂まり、昨年度は北支から九十五萬人が入滿し、六十三萬人が歸國したが、入滿苦力の増加と共に移送金、持歸金も増加し、昨年のそれは大體一億五千萬元に達すると推定されてゐる。これがバーで聯銀券に引換へられるのであるが、滿洲國からの物資輸入によつて決済されない限り、北支に於ける通貨の増發となること明かであつて、北支向物資供給の増額が北支當局から滿洲國に對して要求されてゐる。

III 爲替の低落

最近の北支物價高が爲替の低落に影響される處大なることは、今更喋々するまでもなく明かである。天津の物價指數は四月の四四一・五六から五月の第一週には四七六・五一、第二週には四八九・二四と二週間の間に一〇％方騰貴して、事變以來最も激しい昂騰を示したが、これが直接原因としては専ら爲替の低落に基いてゐることは、注目されなければならない。

五月二日法幣安定資金が爲替統制賣を停止したために、法幣は第五次暴落を演じたが、これにつれて天津爲替も左の如く低落した。

日	對 英	對 米	對 英	對 米
五月一日	三片 <sub>5</sub>	五弗 <sub>15</sub>	二片 <sub>15</sub>	三弗 <sub>5</sub>
二日	二片 <sub>4</sub>	四弗	二片 <sub>15</sub>	四弗
三日	二片 <sub>4</sub>	四弗	二片 <sub>15</sub>	四弗
四日	二片 <sub>4</sub>	四弗	二片 <sub>15</sub>	四弗
五日	二片 <sub>4</sub>	四弗	二片 <sub>15</sub>	四弗
六日			二片 <sub>15</sub>	三弗 <sub>5</sub>
七日			二片 <sub>15</sub>	四弗
八日			二片 <sub>15</sub>	四弗
九日			二片 <sub>15</sub>	四弗
十日			二片 <sub>15</sub>	四弗
十一日			三片 <sub>5</sub>	四弗

即ち一日の三片<sub>4</sub>から二日の二片<sub>4</sub>へと約二四%方激落したのであるが、これを眺めて金塊相場は一日の六〇六元から六日には六八六元に吹き上げたのを筆頭に、綿糸は華商の熱狂買に一、三二〇元から一、六五〇元まで奔騰し、つれて高糧、苞米等爲替相場とは關係の薄い土産品に至るまで、程度の差はあれ一列に昂騰した。爲替相場と國內物價との關係は複雑であるが、爲替が低落する場合輸入商品價格を通じて、國內物價に影響を與へることは當然である。しかしその場合でも國內商品にまで波及して來るには相當の時日を要するのが普通である。しかも今回程度の爲替の顛落は、昨年八月にも経験したことであるが、當時に於ては物價はかやうな衝撃を受けなかつたのであつて、今回の物價暴騰の特質を把握する必要がある。

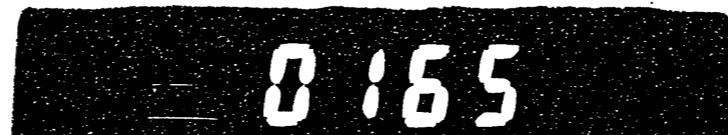
聯銀券は圓と等價リンクを維持してゐるのであるから、二三<sub>15</sub>の對外價值を持つてゐる筈であるが、實質的には舊法幣とほゞ等價の關係をもち、法幣相場に引摺られて動いてゐることは衆知の如くである。法幣第五次暴落當時の聯銀券對舊法幣の關係をみるに、舊法幣一〇〇〇に對して、

五月一日	一〇二八	三二日	一〇五二
二日	一〇三七	四日	一〇三二

と若干舊法幣を下廻つてゐるが、これは舊法幣の不足に基く Basis Value を含むものとも考へられるから、實際にはほゞ等價に近い關係にあるとみてよいであらう。何故聯銀券が常に法幣に引摺られて動くかといふことは、一つの重大問題であるが、此處では右の事實を指摘するに止める。

上述の如く聯銀券が舊法幣と等價に近く、舊法幣は上海の法幣爲替に對して常に若干下廻りながら追隨してゐる關係にある限り、北支の物價が法幣ベーンズであるといふことは首肯出來る。しかしこの場合、北支では輸出入爲替のリンク制が行はれ、そのリンク・レートは八片<sub>4</sub>、一三弗<sub>5</sub>が据置かれてゐることをもつて反駁されるであらう。成程日本商人はリンク・レートで輸出し、また輸入しなければならぬが、外國商人は輸入ビルにプレミアムをつけて輸出商に賣ることによつて、實質的には市場相場で貿易することとなり、或ひは全然舊法幣を用ひて輸入してゐる。更に天津の貿易をみるに、昨年度の對第三國貿易は輸出七千七百萬元、輸入一億五千九百萬元で八千二百萬元の入超となつてをり、この外對上海移入超過が二千萬元に上ると推定されてゐる。とすればこの輸移入超過合計一億二百萬元は少くとも法幣によつて賄はれたことを意味するものであつて、天津の輸入總額の三分一は法幣爲替によつてゐることになる。天津市場に於ける商品流通量が幾許に上るか明かでないが、中支よりの移入その他を考慮すれば、天津市場商品の半數は直接法幣ベーンズであると云ひ得る。

しかし、北支輸入總額の半分を占める日本からの輸入品は、圓元バーの關係から云つて、法幣とは關係ない筈である。日本商品の物價に關しては別項に於て述べるが、物資缺乏の現状では、相對的に安價なるべき日本商品も、物價の引下げには役立たず、却つて法幣ベーンズの市場價格にまで引上げられてゐるのであつて、結局北支



物價は法幣ペーシスとなるのである。

四四

かくて北支の物價が法幣ペーシスであるから法幣低落につれて昂騰するといふことは認められるが、五月初に見た如く法幣暴落に伴つて國內商品に至るまで暴騰するといふことは如何なることであるか。昨夏の法幣暴落の際には物價はそれ程衝撃を受けなかつたのに、今回は程度の差こそあれ、一齊に奔騰したのである。これは北支に於て通貨不安が昂まつてゐる結果として、投機思惑が盛んになつてゐることを意味するものであり、物價は何か動機さへあれば騰げよう騰げようとしてゐるのに對して、法幣第五次暴落は絶好の機會を與へたとも見られるのである。

#### IV 換物思惑の増大

止まる處を知らぬ物價の昂騰と爲替の低落が通貨に對する不安人氣を醸成することは當然であり、物資の缺乏と相俟つて物資に對する思惑を増大せしめる。上海の場合に比べれば、北支では上海程の遊資を擁さないだけにその規模は小さいが物資思惑は最近著しく目立つて來た。思惑は先づ金に集中されたやうであるが、現在では麵粉、綿糸布、砂糖といった生活必需品に集中されてゐる。五月初の綿糸布の暴騰については、さきに數字をあげたが、これが輸入採算に基くといふよりは全く思惑的なものであつたことを示すために、その後の動きを見れば、五月六日に一、六五〇圓に躍上つた一七八馬は、中旬には一、五五〇圓から一、二五〇圓に反落してゐる。五月一日設立された華北綿糸布商組合が、自衛策として先物取引の禁止と共に素人筋及び兼業者への賣的中止を決定してゐる處よりみても、素人筋までが思惑投機に走つてゐることが窺はれる。

この外最近の投機的傾向を語るものとして、不動産投機をあげることが出来る。日本人の増加のために、事務所、住宅が拂底してゐることも原因してゐるが、北京では家屋の投機が非常に盛んで、家屋が人手から人手へと渡されてゐる。事變勃發間もない頃五萬元位であつた家が、三十萬元、五十萬元を唱へてゐるといふ話も聞いた。かかる投機的思惑が物價の上騰を煽るといふことは、統制機構の欠陥——統制の困難さと關聯して、北支物價の前途に對する重大性を感せしめる。

#### (三) 北支に於ける邦品物價について(東京物價との比較)

内地より北支の物價を論ずる場合、圓元パーにありながら北支の物價が内地物價の何倍かに當るため、内地から北支へ物資が流れて行くに反して、北支からは輸入が困難であり、そのために著しく片貿易に偏する結果となつてゐることが問題とされてゐる。北支向輸出は關域輸出調整令によつて統制を受けてゐるのであるが、事實は統制の網を潜つて流れて行つてゐる。我々が天津を訪れた時には、英佛租界の碼頭には座一つないのに、日本租界の碼頭には見渡す限りアンペラで覆はれた貨物が身動きもならぬ位に積まれてゐて、滞荷問題が喧しくなつてゐた。これは北支の物價高につれて、在留日本商人が内地から思惑的に買付けた商品であつて、統制の眼を潜つて仕入れたものの、資金貸出が引締められて引取ることも出来ず、さりとて倉敷料は拂へないし、拂へても倉庫が既に満腹で入れることも出来ないといふ譯で野暮しになつてゐるといふことであつた。

關域向輸出は、元來内地の諸統制によつて價格を縛られ、就中九・一八價格に規正されてゐる筈であるが、統制機構の不備のため實際には極く一部の商品を除いて殆んど自由に放任されてゐる状態にある如くである。この

四五

四六  
 點は滿洲國の場合にも觸れて置いたが、滿洲國では日本からは九・一八價格を無視して入つて来るが、滿洲から日本へ輸出する場合には九・一八價格を適用され、頗る不公平な状態にあると當局者がこぼしてゐた。滿洲國に於てかかる状態であるから、統制機構の欠除した北支で、九・一八價格を實行し得ないのは當然であり、また物資が不足し、物價水準が内地の何倍かに當る北支で、内地並の價格で賣らせるといふことも、凡そ意味のないことである。

それはさておき、實際内地の商品は北支でどの位に賣られてゐるであらうか。それはまた北支の物價水準と内地の物價水準との比較にもなる。かかる意味からも北支に於ける内地品價格の調査が重要となるが、また内地品は在留日本人の生活上からもその動きが注目されるため、今春中國聯合準備銀行臨時物價調査案が主體となつて、北支邦品物價調査會が成立し、昨年十二月末を基準として、三月一日以降の邦品卸、小賣物價調査を開始した。

同會天津支部調の天津邦品物價をみるに、五月初旬には邦品も人絹糸、綿布を筆頭に躍騰し、昨年十二月に比較すればスフ織物、人絹糸、綿布、砂糖、新聞用紙、小麦粉等は、二倍乃至三倍弱に暴騰してゐる。この騰貴率は、一般物價の騰勢を遙かに抜くものであつて、北支の物價騰貴をリードしてゐたことを知り得る。而して五月初旬の邦品物價は、果して内地に於ける價格の何倍に當つてゐるであらうか。内地の價格に關しては五月初旬の調査はないが、三月上旬に調査した数字があるので、前記邦品物價調査會の調査中主要なるものについて、左に比較對照してみたい。東京の價格は公定價格も相當多く、また卸賣では九・一八價格が嚴格に適用されてゐると思は

れるから、三月上旬の價格をもつて直ちに五月上旬の價格と見做しても、大きな誤差はないと信ずる。

第二十表 天津に於ける日本商品卸賣價格との比較 (昭和十五年五月初旬單位圓)

品名	單位	天津	東京	東京と天津相場指數
朝鮮米	六〇斤	二二・五〇	一四・七一	一五三・〇
小麦粉	二二斤	一五・〇〇	六・五五	二二九・〇
白粉	一担四斗五升	一八〇・〇〇	八一〇・〇〇	二二二・〇
白糖	四打入一箱	二七・五〇	一七・八七	一五三・九
糖	一三五斤	二七・二〇	三二・六七	三八九・六
金銀星二〇B	二〇〇封度	一七・八・八	一七・八・八	九九八・三
絞パンス人絹糸	二八吋一ヤール	二・一六	〇・五三四	四〇七・五
SF生地ホプリン	一碼	二・五九	〇・五五五	四六三・六
紙	B 横造紙	一・一三	〇・二二三	四九一・三
木	小角(杉、松)	〇・五四	〇・二五	二二六・〇
苛性曹達	三〇〇斤	一九〇・〇〇	八四・三〇	二二六・五
調合ペイント	一五斤	一三・〇〇	一・〇〇	二〇九・〇
石	燈 用	一四・〇〇	一・〇〇	二一五・三
カソリン	一壇	一五・〇〇	七・三〇	二〇五・四
洗滌器	洗面器三六程	一九〇・〇	六・五五	二九〇・〇
平均				三二四・六

即ち第二十表の如く、天津價格は東京價格に比し、人絹の十倍高を筆頭に、紙の五倍、ス・フ織物の四倍半、人絹織物、砂糖の四倍等軒並驚くべき高値を示し、最も安い處でも一倍半乃至二倍に及んでゐる。右の十五品目のみから算術平均を算出することはかなり無暴であるが、詳細且つ精確なる数字は同調査會の調査に俟つこと、

して、暫定的に右の如き算出方法を用ひるならば、五月初旬の天津邦品価格は、東京価格を100として三二四・六に當る。運賃、保険料その他の諸係並びに關稅等を考慮に入れるとしても、三倍を上廻る高値にあると云ひ得るであらう。同一方法によつて同一商品につき調査した三月上旬の指数は二六八・三であつた。内地の卸買價格が騰貴してゐないのに對して、北支では既述の如き激騰を演じてゐるのであるから、この開き益々大きくなつて行くことは明かであり、五月には三倍半位になつてゐるであらう。圓元バー維持の大方針が確立された以上、今後はこの價格の開きを如何に處理するか、殘された問題である。

從來北支では、低物價政策乃至物價騰貴抑制策を採用し、邦品については九・一八價格を適用せんとしてゐたのであるが、事實は右の如く邦品が北支市場を獨占乃至壓倒してゐる砂糖、人絹糸布、ス・フ織物等に於て特に高値を示し、低物價政策は徒らに輸出品の買付價格のみを押へる結果となつて、その生産減退をさへ誘發してゐたのである。處が先般この方針を一擲し、輸入組合機構によつて北支輸入邦品の九・一八價格に對する超過利潤を徵收し、これを輸出組合に交付することによつて對日輸出の不利を相殺せしめ、輸出品の買付價格を引上げて、物資出廻促進にも資せんとする方針に轉換した。この貿易機構確立によつて問題は著しく解決されるが、内地に於てもこれに對應する機構の整備強化が行はねばならない。

なほ内地と天津價格との開きに關する研究のために、砂糖の價格構成に關して天津支那問題研究所の調査を左に引用して置きたい。今年一月末現在の内地一〇〇斤建卸買價格を基準とした天津卸、小賣價格の構成であるが、種々の問題を示唆してゐるやうに思はれる。

一、内地價格	100.00	七、關稅關係	3.60
二、輸出價格	141.00	八、附帶雜稅	0.30
三、海上運賃(神戸+天津海上保險、雜費を含む)	6.00	九、天津到着價格	186.00
四、倉敷料(天津に於ける毎袋)	0.20	十、天津卸買價格	231.00
五、金利	1.20	十一、天津小賣價格	241.90
六、天津倉庫費(運搬費)	1.60		

(支那經濟旬報昭和十五年六月一日號より引用)

### 五、中支(上海)

#### (一) 物價騰貴の現状

中支といつても、此處で取扱ふのは上海、しかも日本軍統治外の共同租界を中心とする物價についてである。中支に關しては、現在信憑すべき卸買物價指數を有しない。上海では從來中國國定稅制委員會が卸買物價指數を調査公表してゐたが、一九三八年九月以降發表を停止してゐる。従つて上海では、物價を論ずる場合に共同租界工部局の工人生活費指數が用ひられるのであるが、生計費指數には生産財は全く包含されず、専ら消費財と住居費、文化費等に基いて計算されるのであるから、卸買物價指數とは別個のものである。たゞ生計費指數によつても、物價の大體の動向を窺ふことが出来るといふ意味に於て參考することが出来る。従つて上海に關する限り種々の資料をつき合はせて、最近の物價上昇の趨勢を傳へることに努めてみたい。

上記の如く、固定稅則委員會の上海卸買物價指數は一九三八年九月以降公表されてゐないのであるが、上海に

於て筆者はその後の該指数なりと稱するものを啓見した。一九三八年八月までの数字が従来公表されてきたものと多少異つてゐるので信用出来ないが、参考のために掲出する。

第二十一表 上海卸賣物價指數

年	月	指數	年	月	指數
一九二七年	八月	九七三	一九三八年	八月	一五七・七
一九二八年	九月	九七三	一九三八年	九月	一五七・八
一九二九年	十月	一〇〇・〇	一九三八年	十月	一六〇・三
一九三〇年	十一月	一〇九・九	一九三八年	十一月	一六〇・三
一九三一年	十二月	一一二・二	一九三九年	十二月	一五九・四
一九三二年	一月	一〇七・六	一九三九年	一月	一六二・一
一九三三年	二月	九九三	一九三九年	二月	一六五・五
一九三四年	三月	九九三	一九三九年	三月	一七二・一
一九三五年	四月	九二九	一九三九年	四月	一七三・二
一九三六年	五月	一〇三・八	一九三九年	五月	一七六・一
一九三七年	六月	一一三・五	一九三九年	六月	一九〇・七
一九三八年	七月	一一三・六	一九三九年	七月	一九三・五
一九三八年	八月	一一三・四	一九三九年	八月	二五三・〇
一九三八年	九月	一一三・二	一九三九年	九月	三〇四・〇
一九三八年	十月	一三六・七	一九三九年	十月	三二八・〇
一九三八年	十一月	一三五・八	一九三九年	十一月	三二〇・〇
一九三八年	十二月	一三八・九	一九三九年	十二月	三五五・〇
一九三八年	平均	一四六・四			

それによつてみるならば、昨年十二月の指數は三五五・〇で、事變前年を基準とすれば三四二・〇となり、同一基準の天津指數二九〇・三を遙かに上廻つてゐる。しかしながら同期の上海工人生活費指數（一九三六年一〇〇）も三〇四・〇六に達してゐるから、上海では昨年末に既に事變前の三倍以上に卸賣物價が昂騰してゐたことが證明される。

北支では本年に入つてから特に顯著な騰貴を示したのであるが、上海ではどうであつたらうか、國定稅則委員會指數なるものも昨年十二月までしか知ることが得なかつたので、それ以後については他の資料を求めねばならない。工部局の工人生活費指數は、昨年十二月の三〇四・〇六から、本年一月には三二七・四四、二月には一舉三七七・九二と暴騰してゐるのであるから、修正前後の一般物價の騰り方は、更に激しいものがあつたのであらう。しかるに同指數は三月三六八・〇八、四月三六四・七二と低下し、法幣第五次低落につれて諸物價が狂騰を演じた五月に於て、漸く三八二・九一と二月の指數を僅かに上廻る反騰を示したに止つてゐる。生活費指數と卸賣物價指數とは異なるのであるが、それにしても果してこれを額面通りに受取つてよいであらうか。そもそも工部局の該指數は、工部局使用労働者の賃銀標準に資するために使用労働者約百二十人の世帯について調査したものであるが、同指數が逐月上昇を示すことは工部局職員備員の給料引上げを必要ならしめるし、また昨年来共同租界に於て激増しつゝある労働爭議の激増に拍車をかけるものであるとして、本年四月以降公表を中止した事實を想起する必要がある。このことのみからして速かに同指數の作意的性質を斷ずるのは早計であるが、若干の疑惑を抱かざるを得ない。假りに生活費としては斯様な趨勢にあると譲つても、卸賣物價はこの間もつと大きな動きを示し



てみた管である。

第二十二表 上海工人生活費指數 (上海公共租界工部局發表) (一九三六=一〇〇)

時期	食物	住家	衣着	燃料	雜項	總指數	國幣購買力
一九二六年	一〇三・四六	八五・六三	一〇八・二二	七〇・二二	七九・七五	九五・二〇	一〇五・〇四
一九二七年	一〇四・〇〇	八五・九〇	一〇六・九三	七六・五七	八・五三	九六・三四	一〇三・九一
一九二八年	九〇・三四	八五・七三	一〇七・八三	七七・五九	九〇・九三	八八・九八	一一三・八
一九二九年	一〇〇・九四	八八・八八	一一四・七四	八二・五七	九三・九三	九七・〇八	一〇三・〇一
一九三〇年	一一八・九七	九二・五九	一二七・〇五	九八・六三	一〇二・二六	一一二・九	九八・九四
一九三一年	一〇七・七〇	九七・九九	一二三・七三	一一五・五九	一一〇・六六	一〇八・三六	九七・二八
一九三二年	一〇〇・三三	一〇〇・七三	一二四・六六	一一二・九	一一〇・九七	一〇三・八七	九七・二二
一九三三年	八六・三六	一〇五・七七	一一二・二八	一〇〇・〇〇	九八・五七	一〇二・八七	九七・二二
一九三四年	八八・二二	一〇六・〇八	一〇〇・六九	九三・六八	九九・〇〇	九六・六八	一〇七・九〇
一九三五年	九八・八四	一〇三・三三	九六・六七	九八・八四	九六・二〇	九三・九九	一〇六・九九
一九三六年	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇
一九三七年	一一三・三三	九六・六八	一一二・二八	一一〇・〇〇	一一〇・〇〇	一一〇・〇〇	一一〇・〇〇
一九三八年	一二三・三三	九六・六八	一二三・三三	一二三・三三	一二三・三三	一二三・三三	一二三・三三
一九三九年	一三三・三三	九六・六八	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三
一九三九年一月	一三三・三三	九六・六八	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三
一九三九年二月	一三三・三三	九六・六八	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三
一九三九年三月	一三三・三三	九六・六八	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三
一九三九年四月	一三三・三三	九六・六八	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三
一九三九年五月	一三三・三三	九六・六八	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三
一九三九年六月	一三三・三三	九六・六八	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三
一九三九年七月	一三三・三三	九六・六八	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三	一三三・三三

幸ひ在上海日本商務官事務所に於て昨年五月以來重要商品十四種、八百品目について上海市場の卸賣物價を調査してゐるので、同調査を借用してみたい。昨年五月を一〇〇として、種別指數は左の如き發展を見せてゐる。

第二十三表 上海卸賣物價 (一九三八年五月=一〇〇)

品名	二月	三月	四月	五月
棉	二九六	三〇八	三三三	三〇七・七
花(六品)	二九六	三〇八	三三三	三〇七・七
絲	二〇八	二一九	三三四	一九七・三
糸(七品)	二〇八	二一九	三三四	一九七・三
紗	一八〇	二〇〇	三〇四	二〇七・九
織物(一〇品)	一八〇	二〇〇	三〇四	二〇七・九
海産物(一〇品)	二九六	二七二	二七六	二八三・三
金類(七品)	二九六	二七二	二七六	二八三・三
石炭(五品)	三〇六	三一九	三二六	三二七・七
木材(三品)	六三九	五六四	六二二	六三九・九
平均	二四五	二九八	二九八	二九八・〇
セメント(一)	二七三	三〇九	四〇九	三三三・三
鐵物油(五)	一九六	一九四	二二〇	一九七・三
工業藥品(九)	三六〇	三八六	三六二	三六二・二
染料(五)	三五二	三九四	四一八	三九四・一
洋紙(三)	三三四	三三〇	三三〇	三三〇・〇
糧食類(二)	三三三	三〇〇	二九六	二九六・〇
平均	三〇五	三二二	三二二	三二二・二



右調査によれば卸賣物價は、三月、四月も緩慢の差はあれ上昇を続け、四月には換物人氣が相當高潮した結果、昨年五月に比し二四七%方高位に進んでゐる。勿論この數字も、上海卸賣物價の態様を完全に反映するものであるかどうか、一應疑問を持つてみなければならぬが、工人生活指數が同一期間に一一%方の騰貴にすぎないのに比して、著しい開きを見せてをり、更にまた同一期間に於ける天津卸賣物價の昂騰率九四%に對比しても遙かに上廻つてゐる。後述する如く、昨年中は北支の物價が中支よりも一般に高かつたにも拘らず、最近でははゞ同水準に近づきつゝあるとみられるから、右期間の騰貴率は上海の方が大きい筈であるけれども、この數字は餘りかけ離れすぎである。従つて相當の割引をしなければならないが、最近に於ける上海物價の昂騰は、決して輕微なものではなかつたといふことは證して餘りあると考へる。

しかも五月初頭の爲替暴落に際しての物價暴騰は、天津に於けるよりも一段と激しいものであつた。上海では諸物價が一舉に平均二割五分方躍ね上つたといはれてゐる。爲替の低落率よりも遙かに大きな昂騰を演じた譯である。中でも一番激しかつたのは、思惑の集中してゐた綿糸布相場であつて、換物人氣から近來の最高を記録した四月半ばの相場を苦もなく突破して、五月四日には驚くべき高値を示現した。綿糸布現物の相場は左の通りである。(單位元)

綿糸二十番手藍風	一九三九年五月末	同 十月二日	一九四〇年四月十五日	同 五月四日	同 五月十四日
綿糸細布龍頭	三七五・〇〇	七五〇・〇〇	一、二八五・〇〇	一、六〇〇・〇〇	一、三三〇・〇〇
諸物價の奔騰を眺めて、	一一九・〇	二二〇・〇	四五・二五	五五・〇〇	四八五・〇

民衆は血に飢えた狼のやうに百貨店、商店に殺到し、戸を降した店にはガラスを破つて

群衆が流れ込み、百貨店さへも店頭はガラ空きになつたと傳へられてゐる。如何に換物人氣が旺盛であるか想像されるが、諸物價の奔騰が換物的思惑人氣に煽られたものだけに、歐洲戰に於けるフランスの降服、ニューヨーク株式の反落等の報を入れるや、綿糸布を筆頭に一齊に反落した。最も思惑の強かつた綿糸布あたりでは暴騰前の値以下に落ち、ために綿糸布商には破産者が續出、素人仲間でも手痛い打撃を受けたものが多かつた。しかし大反落は綿糸布の如き全く思惑的投機の對象となつてゐた商品に限られ、その他の商品中には、法幣建から米弗建に移つたものもあるといはれてゐるから、法幣暴落を機として相當の値上りをみたことは確實である。従つて五月の物價は、五月初頭に考へた程大きなものではないとしても、なほ近來稀な昂騰を記録してゐる筈である。五月中旬、上海で物價を調査してゐる人の口から、「上海の物價は事變前の四倍を超えた」といふ言葉を聞いたが、大過ない評價であらう。

(2) 北支物價との比較

從來北支と中支との間には密接な物資交流關係が存在してゐたが、現在はパーター制によつてこの交流關係が規制されてゐることは、衆知の如くである。而して昨年度の北中支間の物資交流の實績をみると、北支から中支へは約九千五百萬元の物資が供給され、中支から北支へは一億四千五百萬元が供給され、結局中支は北支に對して五千萬元の移出超過となつてゐる。北支にとつてこの移入超過が、聯銀券價值低落の一重要原因となるのであるが、昨年度に於ては北支の物價が中支よりも高かつたことが、中支から北支への物資流出を激成してゐたことも亦明かである。津浦線上では徐州と蚌埠とが經濟上の北中支間の境界となり、蚌埠までは軍票區域となつてゐる。

るのであるが、昨年此處に聯銀券が氾濫して、非公認の錢莊が輩出してゐた事實がある。中支から北支向の密移出が行はれてゐたことを示すものであつて、正に滿洲國の西南國境地帯に於て見られたと同一の現象である。

個々の商品について云へば、北支の水害その他による食料不足を反映して、昨年未までは麵粉、雜穀、砂糖等を筆頭に雜貨等が、大體二、三割方北支の方が高かつたやうで、これらの商品があらゆるルートを通つて北支に流れたといはれてゐる。しかし最近では、正確に云へば修正前後から、中支でも食料問題は重大化し、換物人氣高潮して諸物價奔騰した結果、五月現在では中支の物價は北支とほぼ同水準に近づいてゐるといふのが各方面の一致せる意見である。

二三の商品についてみるに、石炭は北支では開平炭が二十元内外に押へられてゐるのに對して、上海では北支炭の移入杜絶から二百三、四十元を唱へ、十倍を超える高値にあつて最も注目され、棉花も北支では買付價格が押へられてゐるために上海の方が可なり高値になつてゐる。これと逆の地位にあるのは綿糸布、麵粉等であつて綿糸布は上海の方が思惑が激しいにも拘らず、多大の滞荷を有してゐるだけに北支より若干下廻り、麵粉も北支の方が需給逼迫から引續き高張つてゐる。しかしその開きは石炭、棉花に於ける程大きくはない。

一般的物價について北中支間の比較が出来れば望ましいのであるが、適當な調査がないので、前記上海商務官事務室調査の四月上海卸賣物價と、支那問題研究所調査の四月平均天津重要商品卸賣物價とについて、比較對照し得るものゝみを取出して左に對比してみる。單位の相違するものもあるので、比較指數を算出することは困難であるが、平均してみれば日立つ程の開きはないうである。第二十四表につき検討されたい。

第二十四表 上海天津重要商品卸賣價格比較 (一九四〇年四月)

品名	單位	上海(最低,最高)	天津(平均)	品名	單位	上海(最低,最高)	天津(平均)
棉花	百斤	二二五.〇〇	西阿米格 九五.〇〇	石炭	噸	二二〇.〇〇	二二〇.〇〇
棉花二十番手	一担	九〇〇.〇〇	一八.五〇	開平塊炭一號	一噸	二二〇.〇〇	二二〇.〇〇
棉花龍頭細紗	一反	二九〇.〇〇	三三.七六	同粉炭二號	一噸	二〇〇.〇〇	二〇〇.〇〇
アンソール	五十斤	六三〇.〇〇	六三.〇〇	セメント	五十斤	九〇.〇〇	八九.三
釘	一擔	五四〇.〇〇	五八.六五	石油	一兩	二七.〇〇	三三.〇〇
眞鍮板	五十斤	四三〇.〇〇	三〇.〇〇	カッソン	一担	二八.五	一五〇.〇
鐵	一ト	五九五.〇〇	三三.〇〇	印刷模造紙	一封度	一〇.〇〇	〇九.五
				麵粉	四九封度	一四八.〇	一四八.五

(三) 米價の問題

上海では上述の如く、石炭が二百元を越え、戦前の十倍にも上つて、製造工業並びに一般生活に大打撃を與へてゐるが、昨今これに劣らず重大になつて來たのは米價の問題である。これは中支の物價問題の特性を示唆する處大きいから簡単に述べてみたい。

先づ米價を見るに一等白米一擔の相場は大體次のやうな足取りを示してゐる。

事變前	一九四〇年五月	六〇元
一九三九年三月	同	一四元
八月	同	四〇元
十二月	同	四八元
		五七

昨年三、四月から騰げ始めた米價は、約五ヶ月間急激な上昇を示し、一服の後昨年暮以來再び騰勢を續けて、六月に入つてから特にひどくなつた。米は中支民衆の日常主食品である處から興亞院華中連絡部でも重大視して、昨年十二月十七日軍票交換米價格を石三十七元と決定したのであるが、その當時共同租界では石五十四元を唱へてゐたから、租界の米屋は支那人を使つて虹口側に殺到し、取付騒ぎを演じる始末に、低米價政策は失敗に歸した。他方共同租界でも、ハム、ペイコン等外人の生活必需品の價格統制と共に米價の公定を行つたが、統制に強制力が伴はないので、全く有名無實に歸し、連日公定價格の引上げを行つてゐる状態である。

而して上海では、最近外米の價格が米價をリードし、外米は爲替相場低落によつて昂騰し、つれて土産米も騰るといふ關係になつてゐるが、近頃の米價昂騰は、爲替相場による採算を遙かに上廻つてゐる。米の生産地帯たる中支に於て、米價が外米にリードされることとは、日本軍占領地域の土産米搬出制限によつて上海に土産米の入荷が減少し、且つ一方人口の膨脹によつて消費が激増してゐることに基因してゐる。しかし上海でも米が全く拂底してゐる譯ではない。昨年十月頃の不足が喧傳された時にも、米商の手許には相當のストックがあつたのであつて、現在でもなほ幾許かのストックが存在してゐるが、數人の巨大な米商の思惑によつて米價が操られてゐるといはれてゐる。彼等は隠匿に對する取締が厳しくなると、英人の倉庫に移して取締の眼を滑るのである。産地からの搬出制限によつて入荷が減つてをり、爲替低落によつて外米の輸入價格が昂騰してゐることが根本的原因であるといへ、思惑的な買占め、買惜みが最近の米價高の直接的原因として有力に作用してゐることは、上海に於ける一般物價騰貴に共通の現象として注目されなければならない。

上海の米價高の特殊性を示すために、産地の米價を見れば、昨年八月上海で一俵(八〇疋)四十六元を唱へてゐた時に、安徽省廬州及び蕪湖に近い潯鎮、油鎮——いづれも米の集散地たる蕪湖への中間的集散地——では僅か五元八角で、事變前より二角位の安値にあつた。當時蕪湖では縣公署の公定價格が十四元であつたが、上記の諸地點から蕪湖までの運賃を二元と見積り、蕪湖から上海までの運賃を十元と見込んで、上海の價格は二十六元になる譯で、當時の上海米價の約半分にすぎない。

右は昨年八月の數字であるが、同様の例は現在でもなほ各地に於て見られ、上海米價の昂騰によつてその開きは一層擴大してゐる。中支物價の複雑性を示す好例である。

#### (四) 物價騰貴の原因

上海の物價騰貴が、法幣の濫發とその爲替低落並びに物資不足に根本的に原因してゐることは論を俟たない處であつて、最近に於ては換物思惑がこれに拍車をかけてゐる。

法幣の發行高に關しては、重慶政府が昨年末三十億元と發表してゐるが、實際には七十億或ひは九十億に達するといはれ、奥地と程度の差こそあれ上海に於てもインフレーションは進展しつつある。法幣の爲替崩落についても、今更此處で述べる必要はないであらうから省略し、物資關係について簡単に觸れてみたい。

北支から南下する旅行者は上海の物資が豊富なのに驚くのみであるが、上海でも生産力は一般的には未だ恢復したとはいへないし、奥地からの物資搬入は制限されてゐるのであつて、一見豊富に見えるのは特殊な輸入物資の豊富さである。上海では共同租界の存在によつて貿易統制が行はれないために、法幣の低落にも拘らず高級奢

修品等が引續き輸入されてゐる結果、表面的には物資が豊富な様相を呈してゐるのであつて、華やかな物資の陰には、一般的な物資の不足が加はりつゝある。この關係は輸入貿易を分析してみれば容易に理解される。先づ上海港輸入貿易額は左の通りである。

上海港輸入額

年	海元	法幣市中元	磅
一九三六年	五三、〇九四	五五三、三〇五	三三、一四〇
一九三七年	五〇、八八四	五〇七、八六八	三〇、二八六
一九三八年	二六、九〇九	三三六、四四四	一六、一七五
一九三九年	五八、〇九八	一、四〇八、八四七	三五、五八八

註 法幣換算率一九三六年一四片、一九三七年一四片、一九三八年一〇片、一九三九年六片

昨年度の上海輸入額は前年に比すれば急増してゐるが、磅價で事變前年と比べれば一割足らずの増加にすぎない。而して、上海港輸入品中特に變動の激しいものを拾つてみれば、第二十五表の如くである。些か煩瑣にわたるが、一瞥を與へられたい。

第二十五表 上海港類別輸入高 (單位千海關金單位)

輸入類別	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
總輸入額	二四四、七三一	二二三、六四一	一六、四二六	三三五、六一七
棉花、綿糸及縫糸	一六、〇九八	七、七二六	五、四四〇	六四、〇一三
羊毛及羊毛製品	一一、一二三	一三、八六一	三、八五二	七、五三二
金屬及鑽石	二七、七四五	三八、七五九	一一、六〇四	一四、二五七
機械及工具	一四、七九三	一五、五七九	七、五七五	八、二〇九
車輛及船舶	一〇、六一五	九、九二七	二、七九〇	三、八二二
其他金屬製品	一六、〇三九	一一、四三二	四、三七〇	五、七四八
穀物及穀粉	六、七八四	五、二二六	四、六一九	一六、九九一
煙草	六、七四〇	七、一二四	七、八〇九	一三、〇一三
石炭、燃料、ピッチ及タール	一、五二七	一、三四五	八、二四四	九、七九二
雜貨	三七、八三三	一九、九四六	五、一一四	九、一〇五

北支の場合と同様に「穀物及穀粉」の輸入が激増してゐるが、中支生産地帯からの移入が大激減してゐるのであるから、「米價の問題」の項に於てみた如く、米は甚しい欠乏を告げてゐる。また「石炭」その他も非常に増加してゐるが、北支炭の移入が激減したために、これを海外に仰がざるを得なくなつた結果であつて、炭價に現はれた如くその需給關係は全く逼迫してゐる。ついで金屬類、機械、車輛船舶等の生産財は、單價の値上りにも拘らず絶對的に減少して上海の工業生産力の減退を示してをり、「雜貨」も急減してゐることは、北支の場合よりも顯著である。たゞ上海に於て特記しなければならぬことは、「棉花、綿糸及び縫糸」の項が、一九三六年の四倍、一九三八年の十二倍に激増してゐる事實である。これは大部分棉花の輸入に負ふものであつて、日本在華紡の活動によつてもたらされたものである。現在上海には五十萬俵の綿糸布滞荷があるといはれるが、右の如き棉花輸入と關聯して考へることが出来る。

かくて上海では、北支に比べればなほ物資が豊富であると云ひ得るもの、工業生産力の減退は顯著であり、奥地からの出廻は激減し、また總輸入額は減少してゐないとしても棉花以外の生産財、消費財の輸入は減少してゐるのであるから、一般商品のストックは次第に欠乏を告げつゝある。適當な例ではないが、この東洋一の消費

都市でも、フランス製の高級化粧品類は既に殆んど姿を消してゐる。歐洲戦争以來輸入は更に困難を加へて來たが、物資が缺乏して來れば一層外國品に對する依存度が高くなるので、爲替相場の物價への影響は益々敏感とならざるを得ない。

一方、上海の物資關係を見る場合には、人口の膨脹を見逃すことが出來ない。上海には精密な人口調査がないから、適確な數字をあげることは出來ないが、一般に最近の人口は四百萬に達してゐるといはれてゐる。事變前の二倍である。共同租界のバス、電車の乗客數からみても、人口の激増は立證される。しかも租界へ流入して來た支那人は相當の資産を有してゐるのであるから、かかる連中がなすこともなく消費生活を續けてゐる以上、上海の消費額は非常に増大してゐる筈であり、現在の生産力、輸入額からみて、上海の物資が缺乏に直面しつつあることは明かである。即ち一方に於ける綿糸布の滞荷を、他方に於ける食料品その他の物資の不足と——此處にも自由都市上海の特異な姿を見ることが出来る。

次に通貨側の事情をみれば、法幣の發行高は前述の如く事變以來急激な増加を見せてゐることは明かであり、また上海に巨額の遊資がたふつてゐることも衆知の如くである。遊資は三十億といはれ、或ひは四十億といはれるが、歐洲戦争の勃發によつて香港、海外に逃避してゐた資金が還流し、また從來一ヶ月二十萬元程度であつた華僑の上海向送金が、香港向から上海向に振替へられて急増して來てゐる事實をも想ひ合はせるならば、四、五十億の遊資が存在してゐると見ても多きに失ふことはないであらう。この巨額の資金が、生産機構の破壊と日支事變の見透し難から、健全な投資物を求めることも出來ずに、思惑的投機に殺到してゐるのである、投機は

先づ家屋、土地の不動産に現はれ、ついで株式思惑が高潮して、昨春秋以來バス會社、電車會社、麥酒會社等上海の變態的繁榮を反映した株式が買煽られた。しかし止まる處を知らぬ法幣の低落と物價の騰貴とによつて醸し出された通貨不安人氣は、當然の歸結として物資思惑に走り換物人氣となつて綿糸布に集中したのであつた。舊正前後から四月にかけて昂揚した綿糸布投機は五月の法幣暴落で最高潮に達し、實に言語に絶するものがあつた。商賣人ばかりではなく、金持もの末亡人や藝者に至るまでが、五十俵買つた、百俵買つたと熱狂したのである。そしてこの思惑が換物人氣から出發してゐた結果として、素人でも現物を引取つてゐたといはれる。

かくて五月初の物價暴騰は、法幣の低落から採算された價格の昂騰ではなく、法幣の一段の低落を見込んだ思惑であり、極端にいへば法幣崩落といふ材料を得て、換物思惑が爆發し、見境ひもなく價格を狂騰せしめたものであつた。正に上海物價の不健全性を露呈するものである。假令現在諸物價が反落してゐるといつても、それは過當思惑の反動と見られるのであつて、法幣の價値如何によつては先行いかなる變動を生ずるやも計り知れず、噴火山上にありといふ感を禁じ得ない。

附 重慶及び昆明の物價について

重慶側の物價については、本報告の範圍外に屬するが、重慶の卸賣物價指數並びに重慶昆明生活必需品小賣物價指數を入手したので、參考までに紹介して置く。卸賣物價は事變勃發の年、一九三七年を一〇〇として本年一月に三四・九となつてをり、假令指數を額面通りに受取つたとしても、天津の卸賣物價指數をかなり上廻つてゐる。生活必需品小賣物價は一九三七年六月、即ち事變勃發の直前を基準としてゐるが、一月の指數は四一〇・八、

二月が四二八・八で、卸賣物價を遙かに上廻つてゐる。同一基準の昆明小賣物價指數は更に高く、本年一月四六六・八、二月五二七・五となつてゐる。しかも卸小賣物價共逐月上昇を辿つてゐるから、最近に於ける物價は恐らく事變前に比し、重慶が五倍、昆明が六倍を越えてゐるであらう。聞く處によれば、重慶ではビール一本五元、タラル一本三元、マツチ一個二角、布靴一足四十元、ガソリン一ガロン十四元半、木綿靴下一足六元半、普通洋服一着二百五十元、尚ブラシ一本二元半、ハンカチ（木綿）一打十五元、布製トランク一個二百五十元、封筒一打二元等々といふやうな法外な値を唱へてをり、五人家族の一ヶ月生活費は最低四百元を要するとのことである。以て重慶の物資不足が如何に激しいものであるかを察すべきである。しかも宜昌作戦以來引續き強行されてゐる援蔣ルート遮断の諸作戦が着々成功を収め、佛印ルート、ビルマ・ルートも押えらるゝに至つたから、重慶への物資搬入の道は殆んど塞がれるわけであつて、今後物資は文字通りに缺乏し、物價は益々狂勝を辿るものと思はれる。

第二十六表 重慶卸賣物價指數

四川建設廳駐渝辦事處調查（一九三七年平均＝一〇〇）（京純幾何平均）

總指數	食料品	衣服類	燃料	金銀及電氣材料	建築材料	雜項
一九三八年一月	一〇九・三	九一・四	一一四・二	一一三・三	一一三・六	九三・四
同 二月	一一九・二	一一二・七	一一〇・一	一一三・七	一一四・〇	一一〇・九
同 三月	一二七・三	一一八・六	一一三・六	一二一・八	一一四・一	一一八・九
同 四月	一二四・一	一一四・〇	一一三・二	一二〇・七	一一四・九	一一七・九
同 五月	一二三・四	一一五・八	一一三・四	一一七・五	一一四・七	一一一・五

The Chinese Economic & Statistical Review 1940 一九四〇年二月號より引用

年 月	總指數	食料品	衣服類	燃料	金銀及電氣材料	建築材料	雜項
一九三九年一月	一二八・二	八九・七	一一七・〇	一一四・四	一一五・五	一一三・五	一一〇・九
同 二月	一三〇・六	八七・三	一一七・四	一一四・五	一一五・九	一一四・二	一一二・五
同 三月	一三二・五	八四・四	一一七・七	一一四・二	一一六・六	一一四・九	一一一・八
同 四月	一四三・〇	八六・三	一一七・七	一一四・二	一一七・四	一一五・四	一一三・六
同 五月	一四三・〇	八四・五	一一八・八	一一三・八	一一四・一	一一四・一	一一三・九
同 六月	一五四・二	八六・七	一二〇・七	一一三・二	一一五・〇	一一四・三	一一三・八
同 七月	一五八・五	八六・七	一二〇・七	一一三・二	一一五・〇	一一四・三	一一三・八
同 八月	一六四・〇	九〇・六	一二四・七	一一三・四	一一五・二	一一四・九	一一三・三
同 九月	一七〇・七	九六・三	一二七・四	一一三・七	一一五・六	一一四・九	一一三・一
同 十月	一七四・五	九九・二	一二七・五	一一三・七	一一五・六	一一四・九	一一三・一
同 十一月	一七八・九	一〇一・〇	一二七・五	一一三・七	一一五・六	一一四・九	一一三・一
同 十二月	一八五・九	一〇一・三	一二七・五	一一三・七	一一五・六	一一四・九	一一三・一
一九四〇年一月	一九九・二	一〇一・〇	一二七・五	一一三・七	一一五・六	一一四・九	一一三・一
同 二月	二〇九・三	一一五・四	一二七・三	一一三・九	一一五・九	一一五・〇	一一三・四
同 三月	二一八・五	一二八・〇	一二八・九	一一四・一	一一六・一	一一五・一	一一三・四
同 四月	二二二・〇	一二八・四	一二八・九	一一四・一	一一六・一	一一五・一	一一三・四
同 五月	二二二・〇	一二八・四	一二八・九	一一四・一	一一六・一	一一五・一	一一三・四
同 六月	二二二・〇	一二八・四	一二八・九	一一四・一	一一六・一	一一五・一	一一三・四
同 七月	二二二・〇	一二八・四	一二八・九	一一四・一	一一六・一	一一五・一	一一三・四
同 八月	二二二・〇	一二八・四	一二八・九	一一四・一	一一六・一	一一五・一	一一三・四
同 九月	二二二・〇	一二八・四	一二八・九	一一四・一	一一六・一	一一五・一	一一三・四
同 十月	二二二・〇	一二八・四	一二八・九	一一四・一	一一六・一	一一五・一	一一三・四
同 十一月	二二二・〇	一二八・四	一二八・九	一一四・一	一一六・一	一一五・一	一一三・四
同 十二月	二二二・〇	一二八・四	一二八・九	一一四・一	一一六・一	一一五・一	一一三・四
一九四〇年一月	二二二・〇	一二八・四	一二八・九	一一四・一	一一六・一	一一五・一	一一三・四

第十七表 重慶生活必需品小賣物價指數

西南經濟建設研究所調（民國二十六年（一九三七年）六月一〇〇）

重慶發行「西南實業通訊」民國二十九年四月號

一九三八年六月	總指數	一五九〇
一九三九年六月	總指數	二五二九
同 九月	總指數	三一〇四
同 十月	總指數	三三一〇
同 十一月	總指數	三五五・一
同 十二月	總指數	三九五・〇
一九四〇年一月	總指數	四一〇・八
同 二月	總指數	四二八・八
一九三八年六月	食品	一一六八
一九三九年六月	食品	一五七五
同 九月	食品	一九四・四
同 十月	食品	二一八〇
同 十一月	食品	二五六六
同 十二月	食品	二七八二
一九四〇年一月	食品	二七九五
同 二月	食品	三〇三〇
一九三八年六月	衣料	一七二・三
一九三九年六月	衣料	三一・一
同 九月	衣料	四〇八・三
同 十月	衣料	四二八・五
同 十一月	衣料	四二二・三
同 十二月	衣料	四二八・一
一九四〇年一月	衣料	四三九・九
同 二月	衣料	四七四・一
一九三八年六月	燃料	一九六・三
一九三九年六月	燃料	二九八・八
同 九月	燃料	三六六・一
同 十月	燃料	三六四・〇
同 十一月	燃料	三九〇・七
同 十二月	燃料	四六四・〇
一九四〇年一月	燃料	五三三・九
同 二月	燃料	五四五・二
一九三八年六月	建築材料	二〇二・八
一九三九年六月	建築材料	三六三・〇
同 九月	建築材料	四〇一・八
同 十月	建築材料	四二五・六
同 十一月	建築材料	四四二・〇
同 十二月	建築材料	四九四・六
一九四〇年一月	建築材料	五三三・九
同 二月	建築材料	五八七・八
一九三八年六月	雜項	一七九・六
一九三九年六月	雜項	三一・八
同 九月	雜項	三九〇・八
同 十月	雜項	四〇四・〇
同 十一月	雜項	四二二・七
同 十二月	雜項	四七五・三
一九四〇年一月	雜項	五〇四・四
同 二月	雜項	四七〇・四

西南經濟建設研究所調 民國二十六年（一九三七年六月一〇〇）

一九三八年六月	總指數	一四〇・九
一九三九年六月	總指數	二〇三・二
同 九月	總指數	四一七・六
同 十月	總指數	四三二・九
同 十一月	總指數	四四八・八
同 十二月	總指數	四六〇・二
一九四〇年一月	總指數	四六六・八
同 二月	總指數	五二七・五
一九三八年六月	食品	一四・九
一九三九年六月	食品	三六四・一
同 九月	食品	四八五・一
同 十月	食品	五〇〇・三
同 十一月	食品	五三八・〇
同 十二月	食品	五四七・八
一九四〇年一月	食品	五九一・九
同 二月	食品	六九六・二
一九三八年六月	衣料	一三〇・八
一九三九年六月	衣料	二二四・五
同 九月	衣料	三二四・六
同 十月	衣料	三二六・七
同 十一月	衣料	三三〇・二
同 十二月	衣料	三三〇・八
一九四〇年一月	衣料	三三〇・八
同 二月	衣料	三四六・一
一九三八年六月	燃料	一三七・二
一九三九年六月	燃料	二七七・五
同 九月	燃料	三七二・七
同 十月	燃料	三九六・四
同 十一月	燃料	四一五・七
同 十二月	燃料	四三七・五
一九四〇年一月	燃料	四九一・二
同 二月	燃料	五一四・三
一九三八年六月	建築材料	一五〇・六
一九三九年六月	建築材料	三五五・三
同 九月	建築材料	四九六・七
同 十月	建築材料	五四八・九
同 十一月	建築材料	五八〇・八
同 十二月	建築材料	五八五・七
一九四〇年一月	建築材料	五八八・三
同 二月	建築材料	六〇一・八
一九三八年六月	雜項	一三八・九
一九三九年六月	雜項	二四七・六
同 九月	雜項	三五七・一
同 十月	雜項	三七二・八
同 十一月	雜項	三八五・七
同 十二月	雜項	四〇二・一
一九四〇年一月	雜項	四二五・二
同 二月	雜項	四四一・二

第二十八表 昆明生活必需品小賣物價指數

